深淵　リプレイ VOL.1

―鐘―

執筆：セナル
監修、編集：在胡
ゲームマスター：在胡
プレイヤー：雨野、PEANUT、OHYASAN、セナル
発行：TRPG サークル THINK&SINK

PC紹介

アル

テンプレート:少年
運命:誓いの言葉、王者の相
幼なじみのセランを探して村を飛び出た少年。

レヴィン

テンプレート:伝書使
運命:失踪、病魔
失踪した恋人ティファを探している。

ジュナン

テンプレート:歩兵
運命:生き返った死者、支配者
ミストレスにより生き返った。ミストレスに念じられると胸に激痛がはしる。

ミストレス

テンプレート:原蛇の魔道師
運命:魔族の刻印、再会の予言
村はずれの館に住む女魔道師。

第1章　夢
―オープニング部―

GM　さて、皆さんPCのデータ等の確認は終わりましたね、ではゲームを開始しましょう。

このシナリオのテーマカードは、黒の野槌『見た目通りとは限らない。しばしば真実は別の場所にあり』です。（※1）
この語り部はこのシナリオの雰囲気を表しています。

では皆さん、自分のオープニングにふさわしいと思うカードを出してください。（※2）

（伝書使レヴィンのオープニングの夢歩き）

『死は安寧。限られし者の宿命なり。それを拒むことこそ悪なり』

GM　伝書使のレヴィンさん。あなたはもう故郷を離れてどれくらい経ちました？
失踪してなんかもう 7 年くらい経ってますよ。

レヴィン　もう7年間も故郷を出てずっと諸国を放浪している。旅を出る前にあなたは思ったものだ。こんな病気だから彼女に見捨てられたんだろうか、と。でも、いつか彼女に再会することだけを夢みてあなたは旅を続ける。街道を歩いていくと、また発作が起こった。がはっ。がは、ごほ、ごほ。
あなたは思う。もう長くないかもしれない。だが、ひとめ、死ぬ前にひとめ彼女に会うまでは、そう思いながら、あなたは旅を続けている。

GM　※1テーマカードには他に通常夢歩きでにおいて1枚補充の運命カードが3枚補充されるという特典があります。

※2これはオープニングの夢歩きです。通常の判定と異なりオープニングとエンディングの夢歩きは必ず成功します。

ルール解説1
深淵には夢歩きと言う特徴的なルールがある。これはカードに書かれた語り部という言葉のイメージをもとにそのPCを中心としたシーンを展開するというルールである。主に幻視や悪夢を見るといったシーンの表現に用いる。

『炎は生きるが故に燃え広がっていく。炎として生きるが故に他者を焼き尽くそうとするのだ』

（原蛇の魔導師ミストレスのオープニングの夢歩き）

GM　久しぶりにあの日の夢をみた。まだ自分が少女だった頃の夢。あなたが長い間暮らしていた町が炎に包まれたときの夢。
慣れ親しんだ道や家々が炎の中で焼け崩れていく。あのときの夢を思い出した。
思えばあれから、ずっとつらい目にあって生きてきた。（なぜ私がこんな目に）そう思って魔道師になり復讐を誓ったこともあった。
でも、その国はもう滅んでしまった。いまとなっては望みはただひとつ。

あのひとに、会いたい

『炎は生きるが故に燃え広がっていく。炎として生きるが故に他者を焼き尽くそうとするのだ』
あの、炎に包まれた町の光景の夢を久しぶりに見、そしてそれからのずっと続いた苦難の人生を走馬灯のように見、あなたは目を覚ました。
あなたはあのひとの名前をつぶやこうとするが、もはや遠い記憶の果てに名前すら思い出すことができない。

ミストレス　（片手を顔にあてうつむきながら）ゆるやかに首を振ります。

『時過ぎれば憎悪さえも小さな思い出に変わる。嵐はいつか去るのだ』

（歩兵ジュナンのオープニングの夢歩き）

ＧＭ　（ジュナンに向かって）あなたは朝方、自室でくつろいでいる。
ちなみに今の季節は秋です。（※３）まだ早朝で、渡り鳥がこの森にも渡ってきていて、君の部屋にも鳴き声が聞こえてきている。久しぶりにすごし易い朝だ。あなたは、早朝で、主人が起きてくるまでまだ間があるから、久しぶりにゆっくりするかな、などと考えている。

※３季節の描写はとても重要なことです。できるだけゲームの早い時期に、季節感及び天候に関する描写を入れておくのは、描写力アップのための第一歩です。

ジュナン　その時、突然心臓が痛くなる。
ＧＭ　心臓が痛い？
心臓がむちゃくちゃ痛い。これは、なんか、主人相当機嫌が悪いようだ(笑)。

ジュナン　ミ、ミストレス様が呼んでいる、って？(笑)
ＧＭ　そうそう(笑)
ジュナン　胸を押さえながら、ミストレスの部屋へ向かう。ダッシュだっ。「お呼びですか、ミストレス様」
ＧＭ　えー、このすがすがしい朝だというのに、あなたが呼んだ下僕は**バタバタ**と無粋な音をたてて入ってくるよ。
「…騒がしいわね、ジュナン」
(笑)
ミストレス　（ミストレスへ）「およびですか、ミストレス様。お呼びでございますか、ミストレス様」
一同　ひたすら名前を呼んでやろう。
ジュナン　えー、頭を下げながら思ったわけだ、あなたは。
こうしてこの女に頭を下げているのも、いつか再びあの愛する者たちに出会う為、と、そう思えばこそ、といつも思うわけなんだが、今はそう思う余裕はないな。
『時過ぎれば憎悪さえも小さな思い出に変わる。嵐はいつか去るのだ』。
ＧＭ　…いつ去るんだろうな（笑）（※４）

『遠く離れても海はひとつ。波はいつか届くだろう』

（少年アルのオープニングの夢歩き）

ＧＭ　夜、あなたは今自分の家で、ベッドで寝ています。こんな夢を見ました。夢の中、場所はわかりません。それが、いつなのかもわかりません。ただ、夢の中、これはどこかの光景だとあなたは直感でわかりま

※４別に深淵だからといって常にシリアスでいなければならないわけではありません、念のため。

す。闇の中、ひとりの女性の影が見えます。
…15、6才くらいの女性の影です。夢の中、彼女は、何かのために泣いています。
これはどこなのかはわからないのですが、これがいつなのかはわからないのですが、夢の中、あなたはこれが現実に起きていることだと直感します。

GM　彼女は何のために泣いているのだろう。あなたは思います。
あなたはふと気がつけきます。
「そうか、彼女は、僕のために泣いているのだ。」と。
　どことも知れぬ場所で、誰ともわからない女性があなたの為に泣いています。何かをつぶやいているのですが、それはもはや声にすらなりません。声にならない声で、言葉にならない言葉で、あなたの為に彼女は泣いています。（※5）

アル　そんな夢を見て、そして、あなたは目がさめます。
目がさめる直前にふと、あなたはこれとは別の夢を見ます。あなたの幼馴染の、セランが闇の中にとらわれようとしている夢です。あなたには、闇にとらわれて泣いていた彼女にセランの姿が重なります。ふと、いやな胸騒ぎがします。そこであなたは目がさめます。

GM　※5全てを読み終えたあとに、もう一度このオープニングシーンを読み返してください。

アル　じゃあ、汗をびっしょりかきながら、はあ、はあ、はあ
とてもリアルな夢でした。あなたは聞いたことがあります。ある種類の夢は、重要な意味をもっていて、それは現実以上に価値がありえる、と。あなたは不安にかられます。そこで、開いている窓から声がきこえます。「おいで」、と声が聞こえます。女性の声です。
どうしますか？
そのまま、その声に導かれるまま、外に、出ます。
『遠くはなれても海はひとつ。波はいつか届くだろう』
何か運命の歯車がまわりはじめたようです。

第2章　出会い
―導入部―

GM　では、ジュナンとミストレスの所にシーンを戻しましょう。

ミストレス　「…遅かったわね、ジュナン」

ジュナン　「申し訳ございません、ミストレス様。およびでございますか」

ミストレス　「…ええ。呼んだのは他でもない。おまえにひとつやってもらいたいことがあるの。あの近くの村のはずれに行きなさい。そこには、一人の、少年がいるはずです。その少年を、この館まで連れてくるのです」

ジュナン　「わかりました。」（※6）
ちらり、と一瞥して、用はすんだとばかりに目線を伏せる。ジュナンを見ながら念じる（笑）

ミストレス　胸の痛みに耐えながら、（苦しそうに）「で、ではまずは朝食のご準備をー」
「草々にいきなさい。朝食の用意はティファの方にまかせます」

※6（実際行われた会話）
ジュナン：少年の**拉致が**任務ですね
GM：拉致言うなー（笑）

（ジュナンを一瞥して「）何をぐずぐずしているの、早く行きなさい。」

GM　少し時間を戻してアルのほうへシーンを移そう。

アル　その「おいで」という声に導かれるようにそっちの方向に歩を進めていきます。

GM　すると森のはずれが、何やら光っているのが見える。

少年　その明かりの光源に向かって、とことこと、近づいていきます。まだ、声は聞こえてきますか？

GM　そうだね。“おいで、おいで”という声に君は近づいてきます。

アル　セランの声、ですよね？

GM　いや、セランの声では…、ありません。

アル　んー、でも、導かれるまま…

GM　いくしかない。森に一歩足を踏み入れると、あなたは、木陰に、一人の美しい貴族風の女性が立っていることに気がつきます。いままで見たこともないような美しい女性で、神々しい雰囲気をまとっています。（※7）

アル　どうしよう…

GM　「きたのね、導かれし者よ」、とその女性は、呟きます。

アル　「はい？導かれし…もの、ですか？」

GM　「あなたは、彼女を、セランを、助けたいのでしょう？今、闇のなかへ捕らわれようとしている、彼女を」

アル　「…はい。僕は、助けたいです。彼女を」

GM　そういうと、闇に覆われようとする、セランの幻影が、その女性とあなたの間に浮かびます。「今これは本当に起きていること。今、この少女が、闇に捕らえられようとしている」

アル　「いま、セランはどこにいるんですか？」

GM　「あなたは、彼女を助けたいのね？」

アル　「はい。どんなことがあっても」

GM　そう言うと、光が、蒼い光が、さらに強くなります。「彼女を救いたい、と。例えば、そのためにあなたが何かを失ってもかまわない、という事かしら？」（※9）

アル　「…はい。僕はどうなってもかまいません」

GM　「そう」。彼女はにっこりと笑います。「でも、だめ。今のあなたでは、まだ力が足りない」

アル　「どうすればいいんですか？」

GM　「強くなりなさい」

アル　「強く…」

GM　「この森の、まっすぐ行ったはずれで、待っていなさい。一人の男が、あなたを迎えにくるはずです。その男の導きに従い、運命と戦っている人々と交わり、そして、強くなるのです」と、彼女はいいます。そして、森の奥を指差す。

アル　じゃ、決意をこめた、眼差しをしつつ、うなずきながら、その、指差した方向へ向かいましょうか。

GM　うん。「強くなりなさい。今のあなたでは、まだ力が足りない」

アル　その言葉が頭の中でうずまいています。

GM　ではつぎにレヴィンのシーンに行きましょう。今あなた何してますか？朝方、8時くらいの時間帯です。

レヴィン　朝方8時くらいか、とりあえず、出発の準備。

GM　ちなみにこの町には昨日の夜着いたので、は聞き込み等何もしておりませんが。よろしい

※7
彼女の正体は歌の口授イェロマーグです（後述）

※9
「なにかを失う覚悟があるか？」
このフレーズは非常に深淵らしいフレーズです。
魔族が問いかけてくるセリフの典型例です。

か？
レヴィン　それを聞いてなかった。すみません。じゃあ今から、情報集めをしようかなあ、と。
ＧＭ　じゃあ、部屋の荷物をまとめて宿屋の階段を降りてくる訳のですね。
（宿屋の主人）「おや、お客人。えらく早いですね」
レヴィン　「ええ、ちょっと。あの、探し人をしてるんで」
ＧＭ　「ほぉう。それはまた。まあ、とりあえずなんだ、せっかく朝早く起きた事だし、朝食でもどうだい？」
レヴィン　「ああ、いただきます」
ＧＭ　「朝粥と、こっちはウチの名物だ」
レヴィン　「ああそれはもう、是非に、是非に。いただきます。身体弱いもんで」
ＧＭ　「ああ、そうなんだ。これは精力がつく薬なんだよ」といいながら、ちょっと苦みの茶を宿屋の主人は入れてくれる。
レヴィン　「ああ、ありがとうございます」
ＧＭ　とりあえず、明日と明後日は、病魔の抵抗に＋１して良い。（※１０）
レヴィン　あ、良かった。「ところで、あのー、あのーおじさん」
ＧＭ　「はい。どうしたんだい？」
レヴィン　「あのー、ここら辺で、ティファっていう女の子の名前、聞いた事ある？」
ＧＭ　「ティファぁ？ティファ、ティファ、ティファ…、ねえ。良くある名前だからなあ。残念だけど、知らないね。どんな娘なんだい？」
レヴィン　「えーっとねぇ。金髪でね、背が僕と同じぐらいで、え―と、２７、くらいかなあ」
ＧＭ　２７…（ぼそりと）だいぶ経っているんだな。「そうかー、２７でティファっていう名前の女なんか、この町には腐るほど、とはいわないけど、たくさんいるからなあ。それは何とも言えないなあ」
レヴィン　「そうですか」
ＧＭ　「もっと特徴とか何かないのかい？」
レヴィン　「特徴、特徴…。んー、特徴って、やっぱ金髪しかないからなあ。困ったなあ」
ＧＭ　と朝粥をすすりながら、あなた達がしゃべっていると、
レヴィン　「おや、レヴィン、レヴィンじゃないか」
ＧＭ　へ？そっちの声の方向に振り向きますが。
レヴィン　えー、宿屋に、朝粥でも食いにきたのでしょうね、あなたと同年代くらいの、商人っぽい男が入ってきて、そう声をかけてきます。一応、知力チェックをしてくれたまえ。知性で目標値１０。
ＧＭ　知性ですね。（ころころ）
レヴィン　「ひさしぶりだなあ」と声をかけてくる。失敗するとみっともないぞ（笑）
ＧＭ　１３で成功です。
レヴィン　あなたが、昔、村に住んでいた頃、よく遊んだ友達で、ガキ大将仲間のひとりです。
ＧＭ　お名前は？
一同　名前？名前は…、えーと…、エートくん。
レヴィン　エートくん（笑）（※８）
ＧＭ　「おや、エートじゃないですか。こんなとこで何やってるんです？」
レヴィン　「ああ。いや、俺は商人だからな、諸国を旅してまわってるんだよ。今、俺は親父の跡をついでな、…小麦運びのエートといやあ、ちったあ知れた名前なんだぜ。」あまりかっこいい呼び方ではないが。
ＧＭ　（笑）
レヴィン　「そっか。何年前か、村を抜け出したときは

※１０
彼は病魔（翼人）の運命を持っているため、毎夕体格で基本判定地１５に成功しない限り吐血する

ルール解説２
深淵では各ＰＣは運命と言われる固有の設定を二つ持つ。アルの病魔のようなものや、ジュナンの生き返った死者等がわかりやすいだろう。
中には定期的に誰かをいけにえに捧げねばならないといった強烈な運命もある。

ルール解説３
深淵の基本判定は技能値（または能力基本値）＋６面体ダイス２個で１０以上で成功というものである。
達成地が足りない場合の対処法は
1.寿命を1年削って達成値を1上げる
2.カードを使用し、カードのナンバー分の数値を足す
の二つの方法がある

※８私のマスターでエート訓君が登場するのは、はたして何度目だろうか？（笑）

何やってんだかとか思いましたけどね。今じゃ、立派に仕事やってるんですか」
GM「ああ、久しぶりだけど、おまえらもう、じゃあなにか、あの村を出て、この町にすんでいるのか」
レヴィン「いや、実は人探しをしててね」
GM「人探し？それはまた…。はやく帰ってやれよ。奥さんが嘆いてるぞ」
レヴィン「奥さんって何です？」
GM「ん？おまえ、あの娘と結婚したんじゃないのか？あっ、それは悪いこと聞いちまったな。すまねえ、忘れてくれ」（※１１）
レヴィン「だから、その人を探していま、旅をしているんです。もうかれこれ７年ですよ、７年」
GM「？おまえら、結婚したんじゃないのか？」
レヴィン（あせりながら）「いや、あの結婚してないですよ」
GM「？悪い事を聞いちまったか？す、すまないな」、と彼は席を立とうとするが。
レヴィン「あの、ち、ちょ、ちょっと待ってくれ。確か商人やってるって言ったよね？あの、テイファを見なかった？」
GM「？いや、だから、おまえら結婚したんじゃないのか？」
レヴィン「いや、してないよ。あ、うん」
GM「いや、**この町で**この間、ちらっと見掛けたけどな」
レヴィン「えっ？」
GM「というか、おれのキャラバンから食料を買っていったけどな」
レヴィン（勢い込んで尋ねる）「**どこで！！**…あ、ここか」
一同（爆笑）
レヴィン（気をとりなおして）「それは本当かい？」

※１１
ここではマスターはプレイヤー発言をキャラクター発言と解して進めています。

GM「あの娘をみたあと、この町でおまえをみかけたから、てっきりおまえと結婚したものとばかり。俺は思ったわけだ。違うのか？」
レヴィン「いや、彼女が実は、突然いなくなっちゃって。それで、ずっと探してたんだ」
GM「それは…、剣呑だな」。彼は嫌そうな顔をする。知性判定をしてください。目標値１０。
レヴィン成功。
GM なぜ彼が嫌そうな顔したか？昔なじみだから声をかけたんだが、（なにやらどうもトラブルにまきこまれているようだ彼らは。やっかい事に巻き込まれるのは嫌だなあ、ずらかるとしよう）、と思ったから、嫌そうな顔をしたわけだ、彼は。
レヴィン なるほど（笑）
GM「なに、失踪したのか。そいつあ、やぶさかじゃねえなあ」。まあ、そうだな、「残念だったな。この町のどっかにいるのはわかってるんだから、探せよ」
レヴィン「ちょっと待ってくれ。ほかに知ってることないか？」
GM「知ってることねえ。おれはあ、商人なんだよ。お客様に、お客様に迷惑をかけるような事は、いえないんだ。わかるだろ？」
レヴィン「…わかるよ。そりゃそうだよな」
GM「だから…、残念だけど、何もいうわけにはいかないんだよ」
レヴィン「いや、わかるけど…、わかるけど…」
GM じゃあ、そこをなんとかお金で…。
レヴィン お金で？じゃあ、運試しをしてみよう。彼はどんな人物なんでしょう？彼が金に汚いか判定しましょうね。野槌のカードがあったら…
GM 野槌のカード？ありますよ。

ルール解説４
運試しとは、ある特定の種類のカードが手札の中にあるか？で判定する、偶然性で決定される事柄を決めるためのルールです。

ＧＭ　じゃあたまたま、彼は、運試しの結果、金に汚い人物だったようだ。
「しかたがないなあ」…（少し間をおき）彼はしばらく考えた後、「彼女には、この間あったとき、食料を配達するよう頼まれたんだ。森の奥に、この町では有名な魔術師がいて、その魔術師の館があるんだが、そこまで食料を届けたんだ」
レヴィン　はあ。なるほど。
ＧＭ　「なにやら、妙な、ローブというか、不思議な服をきていたから、妙に思ったが。まあ、商売だから気にする必要はないしな。てっきり俺は、おまえは、あの森の館で狩人か庭師にでもなって、働いているもんだと思っていたよ」
レヴィン　「あ、ありがと。すまない。」といって、出発します。
ＧＭ　さて、その頃一方、ミストレスの館では。彼が出ていったあと、ドアがノックされる。
ミストレス　「入りなさい」と声をかける。
ＧＭ　「失礼します」。あなたの弟子、ティファが入ってくる。
ミストレス　「なにか」
ＧＭ　「やっと、やっとなんですね？やっと、星の位置が正しい位置になるときが、もう迫っているのですね？」（※１２）
ミストレス　「ええ」とちょっと空を見上げながら、「もうすぐ、もうすぐですよ」
ＧＭ　「もうすぐ、ご主人様や私がずっと長い間、捜し求めてきた望みが、かなうのですね」
ミストレス　じゃあ目線を向けて、「ええ、そのとおりですよ」、と力強くうなずきましょう。
ＧＭ　彼女は、「ありがとうございます、やっと、やっとあのひとに、会える」、と呟いた後、一筋の涙を流して、「ありがとうございます。仕事に戻ります」、といって出て行く。
ＧＭ　そんなことがあった頃、彼女の下僕（笑）が、森のはずれに向かっていると、やはり、いわれた通り、少年がたっている。
ジュナン　しかし、この少年が本当にその少年かきいてくるの忘れているんだが、大丈夫なんだろうか？
ＧＭ　連れてって、「別人じゃない」とかいわれたら大笑いだよな（笑）※１３
ジュナン　声をかけていいもんか迷うぞ。うーん。…。
一同　私が出るとき、少年の名前も何もきいてないよね？じゃあ、確認のしようがないな（笑）
ＧＭ　…聞きに帰ったら半殺しにされるかな。
アル　（笑）
ＧＭ　（少年に）知性判定していいよ。目標値は１０。
アル　１０で成功です。
ＧＭ　成功した？すると、大木の影にいる男を発見するが、いかがする？
アル　じゃあ、その木のほうにむかって、くるっと顔を出すような感じで。
ジュナン　「もしかして、あなたは、僕を探しにこられたのではないのですか？私は、女の方から、こちらに来るようにと」
アル　「貴族風の女性に、会いにこいといわれた？」
ジュナン　「はい」
ＧＭ　「…そうか。ならば、私が探している少年に違いない。共にきてくれるね？」
アル　では、３０分ほどして館に帰ってくる。館、って大きいんですか？

※１２
星の位置が定まるまで、という理由で館にＰＣたちを足止めするわけです。

※１３
大笑いではすまないような気がしますが・・・（笑）

大きいです。森の中の一角を切り開いていて、驚いたことに2階建てだ。おそらく、客室とか、炊事場とか、あるんじゃなかろうか。ちなみに、館のはずれには庭園があって、庭園のはずれには小さな小屋がもう一個ある。その小さな小屋はおそらく庭師なんかが住んでるんじゃないのかなー、と思うような小屋なんだけど、まあ、それぐらいの庭園がある。こんな所に人が住んでる、って話は、町では聞いたことはないですね？

アル　地域知識という技能はあるかな？目標値１０で判定してください。

GM　カード1枚いいですか。１２で、成功にします。

アル　聞いた事があります。なにやら森のはずれには、噂では、おそろしい魔法使いが住んでいて、夜な夜な恐ろしい叫び声が聞こえてきたりすると。子供の噂だからこんなもんなんだけど。しかし、そんなのは噂だけで、大人の話を聞いてると、国王とか、貴族とか、その辺の連中も恐れる力のある魔法使いが、住んでいるらしい。どっちにしてもあやしいね（笑）。

GM　じゃあ、そのまま連れられて屋敷の中へ入っていきます。

アル　屋敷の入り口で、一言だけ、言わしてくれ。

ジュナン　「失礼のないようにな」

アル　（笑）「はい、わかりました」

ジュナン　「君のではなく、私の命にかかわることだから」

アル　「あなたの、ですか？」

ジュナン　「わからなくていいから」

アル　「わかりました」（笑）

ジュナン　で、どこにつれていけばいいのかな？…とりあえず、客間で「ここでしばらく待っていてくれ」。で、ミストレスの部屋の前までいってノックを。

ルール解説５
カードはシーンが変わるごと（つまり一区切りごと）に６枚まで補充されます。
ですので、あるていど思い切った使い方をしてもかまわない、ということを覚えていてください。

ミストレス　「入りなさい」。

ジュナン　「失礼いたします。客間まで少年を連れてまいりました。こちらへお連れするんですか？」

ミストレス　「いえ、私が行きましょう」

アル　では、ミストレスの後ろを歩いて、私も客間へ。

GM　じゃあ、ちょっと落ち着かない様子で、座り具合がちょっとふかふか過ぎて、という感じで。

アル　ドアが開いて、（貴婦人の絵を見せながら）こんな女性が入ってくる。

ミストレス　「（うちのお母さんと、大違いだ）。あなたが、私をここに…」

GM　じゃあ、アルの方を見つめて、軽くうなづきましょう。「まあ、楽にしなさい」

ミストレス　「はい」ちょっと慣れないので。

アル　ちなみに見た瞬間にあなたは、魔法に関係する技能なんでもいい、ふってくれ。

GM　魔法知識でいいですか？…１６。

ミストレス　この少年は、（運命の書をみせながら）この相を持っている。（『王者の相』※１４）

GM　じゃあ、思わず笑みを深くして、「ようこそ」と。

ミストレス　「セランは今どこにいるのですか？」

アル　「まあ、落ち着きなさい。あなたが大事な人のためにこの地にきたのはわかっています。ですが、まだその時ではありません。しばらく、この館で、時を待ちなさい」

ミストレス　「僕は、何をすればいいんですか？」

アル　「とりあえずは、好きなように、この館です

※１４
　王者の相とは生まれついてのカリスマ性を意味する運命です（ルール的には対人交渉系判定＋３）。
　なお、いけにえに大変向いている、という不の側面もあります。

ジュナン　ごしなさい。そう、あと3日、あと3日だけお待ちなさい」といいます。で、（ジュナンに）こちらに目線を向けて、「その間、この少年の世話を頼みます」

ミストレス　「おおせのままに」

ＧＭ　「まあ、することもなく退屈でしょうから、この者に相手をしてもらいなさい」

ジュナン　で、あなた達は顔を合わすわけだ。ジュナン。縁故で判定してくれ。妻もしくは、妻子の縁故で。（※１５）

ＧＭ　…１４。縁故は二人で5やけど。

ジュナン　えー。じゃあ、あなたは、ここで目をあわす訳ですが、世話をする少年の顔を見ると、あなたはふと思います。そういえば、俺の子も、このくらいの年だったなあ、と。少年と少女という違いはあるが、同じ年格好、感慨にふけるわけだ。

ミストレス　「では」、と言って立ち去ろうとしますが、振り向いて、「そうそう、一つだけ、注意しておきたいことがあります。と少年の方に向かっていいましょう。この館の中は、好きなように出入りしても結構ですが、ただし、庭園のはずれにある、小屋の中にだけは近寄らないようにしなさい」といいます。

アル　「なぜ、ですか？」

ミストレス　「近寄れば危険が降りかかることになるでしょう」。で、そのまま立ち去ります。

ＧＭ　では、町にシーンを戻そう。（レヴィンに）どうする？

レヴィン　とりあえず、あのエートさんに聞いた場所にいきます。

ＧＭ　森の中へいきなり向かったんだね？森は深いよ？

※１５　今思えば、こういう場面は本来なら夢歩きで処理すべき場面ですね。

レヴィン　これは戻ったほうがいいかもしれない。

ＧＭ　うん。入る前に思った。この森は深すぎる。

レヴィン　という事がわかるね（笑）。誰か案内が必要だと思ったわけだよ。

ＧＭ　とりあえず、じゃあ、森の中によく入る人に、でも、ちょっと頼んでみようかと思う訳なんですが。

レヴィン　うん。交渉しててもしょうがないんで、どれくらいの時間で、どれくらいに着くか、判定で決めます。社交もしくは、知性で判定。１２で成功なら6時間かかります。、１あがる毎に1時間短くなります。最短で2時間です。なお、時刻は今１０時です。

ＧＭ　１７。

ジュナン　１７？えーと、2時間で、館に連れてってもらえるぐらい優秀な猟師を案内に雇って、あなたは館についた。さて、そのころ、ジュナン達はどうしてる？

ＧＭ　この日私は何か仕事を与えられているのでしょうか？日課が何かあると思うが。

アル　館の掃除、炊事、庭園の世話、等。とりあえず、常識的にいって、客間を整えなければいけないのではないか？

ジュナン　「ねえ、おじさん。みんなの噂では、ここお化け屋敷だって聞いていたんだけど」

ＧＭ　「子供の噂なんてそんなもんさ。とりあえず３日間暮らす部屋に案内しよう」

ジュナン　子供の噂なんてそんなもんだ。見た目の通りとは限らない、しばしば真実は別の場所にあったりする（カードを見ながら）。

アル　でもこんな大きな屋敷にとまるの初めてだな！わくわく。じゃあ、彼のうしろについていきますねぇ。

ジュナン　かちゃっ、とドアを開ける。客室に案内する。

GM　すると、ちょっと若い女性が、そこで掃除をしたり、シーツを整えたりしている。「あ、あなたが、…えーと、お名前は？」
アル　「え、アル、って呼んでください」
GM　「そう、アルっていうの。私は、この館でジュナンと一緒に働いている、ティファっていうの、よろしくね」、と彼女はにっこりと笑う。
アル　「はい、よろしくおねがいします」
GM　（ティファ）「ジュナンさん、彼の客室は私が整えておきましたから」
ジュナン　「あ、ありがとう。」
アル　じゃあ、「お姉ちゃんありがと」、とかいいながら、（ベッドで跳ねる真似をしながら）布団でぽかぽかとか、やっていようかと（笑）。
GM　（ティファ）「もし、お暇だったら、この辺の森でも案内してあげるわね」、とかいいながら彼女はでていくわけだ。
アル　はーい。
GM　（ティファ）「（ジュナンに）仕事は午前中に、私がだいたい片付けたから、午後からは、久しぶりに自由よ」、と彼女はいう。
アル　じゃあ、二人がでていった後、窓をがさーっと開けて、（窓に肘をつく真似をしながら）外を見ていましょう。
GM　森は深いね。秋の木漏れ日が入ってきて、風が入りこんで、気持ちがいいです。
ミストレス　見下ろすとそこには、まあ、それなりに整った庭園が見えます。
アル　例の小屋も見渡せますかね？
GM　例の小屋は見えます。ちなみに木戸みたいな感じの窓です。

GM　じゃあ場面を変えて
レヴィン　（レヴィンに）「じゃあ、この辺で」、と猟師は逃げるように去っていった。
GM　いったいこの屋敷に何があるんだろう。
猟師が、道々話してくれる。子供の噂レベルでは、怪しげな魔物が飛んでいたとか、うなり声がきこえてきたとか。雷がこの館を中心に落ちたとか。とんでもない噂があるんだが、どこまで事実かはジュナンしか知らない。
レヴィン　はっ？ははは（笑）、あやしー。こりゃ確かに、さっさと去りたくもなるなあ。
GM　なんか、確かにとんでもない屋敷かもね。まあ、とりあえず、コンコンコンと。「すいませーん、誰かいませんか？」
ジュナン　えーっと。（ジュナンを見ながら）コンコンとノックされた。あなたは、自室にいる。
レヴィン　…。
GM　…誰もいないのかな、この屋敷には。
えーっと、トントンとノックされると、彼が行かないと…仕方がない、ティファが行こう。こんな服をした（とのイラストを見せる）、愛しの人が顔を出すわけだ。夢歩きをしたまえ。

GM　赤の八弦琴『われは見つめる者。汝の生きざま、とくと見届けよう』
あなたは彼女にあった瞬間に、深い驚きを感じる。7年間もさまよっていた、あの捜し求めていた相手が目の前にいる。そこで、あなたは一瞬驚きで、強い精神的ショックを受けるわけだ。
やっと、やっと巡り合えた、と思った瞬間、あなた達を見ている何か、魔性の者の瞳をあ

なたは感じる。だが、その瞳は、一瞬で消える。で、あなたは精神的ショックから立ち直って、彼女がそこにいるのに気がつく。
彼女も驚いているよ。「レヴィンどうしてこんな所に」

レヴィン　「ティファ、ティファなんだね！」

ＧＭ　「こんな所まで、追ってきてしまったのね」と彼女は呆然とつぶやく。

レヴィン　「そりゃそうさ」

ＧＭ　えー、で、パタンとドアを閉める。ドアの向こうから、「お願い、帰って。レヴィン。今はまだ、今はまだ、あなたと会うわけにはいかないの。」と彼女はいいます。
じゃあそこで、「な、なぜ、なぜだ。」

レヴィン　「もうすぐ、もうすぐしたら、帰れるから」

ＧＭ　「帰れるって…」

レヴィン　「お願い、帰って。…それに、私はもうあなたの知ってる私ではないわ。７年間の間に私はずいぶん汚れてしまった。だから、あなたに会うわけにはいかないの」と彼女はいう。

ＧＭ　「一体何があったというんだ、この７年間の間に！」
ドアの向こうから、「お願い、帰って」、とだけ彼女はいいますが、どうするぅ？（※１６）

レヴィン　じゃあ、とりあえず、「君がなんと言おうとも、僕は帰らないよ」、という。「君を連れて帰るまで、帰らない」

ＧＭ　彼女はかなり困ってるんだが。じゃあ、こう言おうか。あとで、少年でてきて。（アルＰＬ「はい」）。扉の方からこんな声がする。ひどく冷静な声だ。「もう、私はあなたの事を愛していないのよ。」という風に言うよ。「だから、帰って」とかいう。

※１６
ここでレヴィンのプレイヤーが考えるための時間を取っています。

アル　こんな所まで追ってきたとしてもしょうがないのよ、と言ったところに、（アルに向かって）降りてきたい？

ＧＭ　はい。降りてきたい気がします。
じゃあ見ていいよ。あなたが見ると、ティファさんが、後ろ手に、扉にもたれかかるようにして、扉の外の男と口論をしているようなんだが、彼女の目には涙のしずくがふたすじ、みすじ、と。

アル　「おねえちゃん、どうしたの？そんな、涙を…」

ＧＭ　（レヴィンに向かって）君は向こうから、おねえちゃんどうしたの、そんな涙を流して、という少年の声がきこえたぞ？さあ、どうする？

レヴィン　困った…。
…。

　じゃあ、そうすると、…彼女はもう一回ドアを開ける。泣きはらした顔で、あなたを見るわけですがね、「まだ帰ってくれないの？私がこんなに頼んでいるのに、私は今のあなたに会いたくないのに」。というふうな事を彼女は言うがどうする？

アル　…うっ。
「おねえちゃん、どうしたの？そんなに泣いて…」

ＧＭ　「戻っていて…」

アル　「このお兄ちゃんと、会いたいんじゃないの？」

ＧＭ　（アルに）「お願い、黙っていて」と彼女は顔を伏せるよ。「会いたいのだけれど、今は会えないのよ」という。

レヴィン　「帰れないよ」

GM　「なぜ？なぜなの。帰って、っていってるでしょ」、と彼女はいう、泣きながら。
レヴィン　「君を、探してもう7年経ったけど、今でも僕は君のことが好きなんだ。君が、僕のことを嫌いって言っても、僕は、君のことが大好きなんだ！だから、だから君を連れて帰る。どんな事があっても！」…といってみよう。
GM　OKにしてあげよう。そう言うと彼女は泣き崩れてあなたに抱きかかってくる。あなたの胸に、顔を寄せる。で、こう言うわけだ。「ばか、7年前から全然変わっていないのね」
一同　（笑）（※17）
GM　「仕方がない、入って」、と。そうそう、主人。玄関先で騒ぎが起きているようだよ。
ミストレスアル　「騒がしいわね」。
ミストレス　ちょっと恥ずかしくなって後ろ向いてます（笑）
GM　騒がしいわね、一体何事？と思って、席を立つけども…やはり、自分で動く…タイプじゃ、ないかな？「まあ、いいわ」とりあえず、ジュナンに様子を見させてこようと思い、ぱちんと指を鳴らす。
ジュナン　（ジュナンに向かって）なんか痛いぞ。
GM　なんか痛いからとりあえず、部屋へ。ジュナンが部屋へ行こうとすると、（ティファ）「じゃあこちらへきて。この館の主人にお会いするから」と、ジュナンが行くよりも前に、レヴィンと、ティファが、主人の扉の前に立つわけだ。で、ドアがノックされるよ。
ミストレス　「入りなさい」。
GM　（ティファ）「は、失礼します、ミストレス様、お入りしてよろしいですか」といって入ってくる。（レヴィンを指差して）そんな男と、涙を拭いたティファがいる。
ミストレス　では、ティファの方に一瞥をしたあと、その青年の方へ顔を向けます。「あなたは？」
レヴィン　「私は、レヴィン＝ヘンリーク、と申します。はじめまして、彼女を探してずっと、放浪していました」。
ミストレス　「彼女？」
レヴィン　「ええ、ティファの事です」。
ミストレス　「ほう？」…ともう一度ティファの方へ目線をくれましょう。
GM　「お願いします、3日間だけ、3日間だけでも、この館に彼を逗留させて、くれないでしょうか、ご主人様？絶対に、迷惑はかけさせないし、館の中もうろつかないよう自粛させますから」
ミストレス　…。ティファの方をじっと見つめたあと、ちょっと自分の事を思いながら、「いいでしょう。部屋の方は、あなたが用意しなさい」といいます。
GM　（ティファ）「絶対3日間、この館をうろつきまわったり、私のすることを詮索したり、しないでね？」
レヴィン　「ああ。君を連れて帰れさえすれば」（※18）
GM　じゃ客室に案内します。（ティファ）「ここがあなたの部屋よ、と入ってちょうだい。今のが、私の仕えている今のご主人様。…3日、3日たったら、あの町へ帰れるから」
アル　「うん、わかった」。
GM　ところで、アルは何してんの？どうしようかな。二人についてくわけは…ないから、館の中、うろついてますね。そうだね。毒気にあてられてね。

※17
（実際の会話）
レヴィン：（3分経過）
GM：おいおい、どうしたの？
レヴィン：いや、台詞が思いつかないんですよ？
GM：何かあるだろう？なにか？
レヴィン　（5分経過）だめだ、思いつかない、どうしたら彼女を説得できるんだぁー
GM：・・・あのなあ、たとえば「君は嘘をついている、僕にはわかる」とか「君の瞳の輝きは何も代わっちゃいない」とかそういうセリフが言えんか？
レヴィン：言えません！他のプレイヤー！・・・んなセリフ、俺だって言えんわ・・・

※18
ちなみに、もし本当に動かなかったら、かなりマスターとしては困りますね（笑）

アル　ええ。さすがにちょっと（笑）。顔真っ赤にしながら（笑）

レヴィン　（ティファに向かって）「ところでティファ、一体、ここで何をやってるんだい？」

ＧＭ　「きかないでって約束でしょ？」

レヴィン　「…っととと。そうだったな」

ＧＭ　（ティファ）「そういえば、病気の方は、あれからどう？」

レヴィン　「いや、大丈夫さ。うん。あれから全然平気」

ＧＭ　（中略）

ジュナン　その頃一方、館を歩いているアルは、主人に呼ばれて急いで歩いているジュナンと出会う。

アル　とりあえず、少年にかまっている暇はないので、走っていますけどね。

ジュナン　「どうしたの、おじちゃん？そんなに急いで？」

アル　「あとでね」、と言いながら、走っていくよ。

ＧＭ　え？「あれ？おじちゃん」

ミストレス　で、その前でドアをばたっと開けて、また騒がしく入ってくるよ（笑）

ジュナン　（ジュナンに向かって）「（ためいき）もう少し落ち着いて行動できないの、あなたは？」

ミストレス　「申し訳ございません」

一同　でも急いでこないと怒るんだよな（笑）

ミストレス　（笑）

ジュナン　「先ほど、玄関の方が騒がしかったようだけど、あなたは一体その時、何をしていたの？」と詰問口調でいいましょう。

ミストレス　「はっ。そちらの方は、ティファにまかせてあるはずですが…」といいながら眼をそらしましょう。

ジュナン　「困ったものね」。ぱちんと鳴らす。

ミストレス　うっと苦しむ。

ジュナン　「もう少し、あなたは、自分の立場というものをよく、わきまえた方がいいわ。…**逢いたいのでしょう、もう一度？**」

ＧＭ　言葉は出ない。（※１９）

ジュナン　皆さん、この後、夕食の時間まで何かします？…少年は館うろつく、と。

レヴィン　私は昼食の後片付けが。

ＧＭ　まあ、とりあえず。体の調子のこともあるだろうから、ちょっとだけ外をみときましょう。

レヴィン　ああ…外を見てるだけかい？

ミストレス　いや、ちょっと、歩いてみようかなあ。…彼女に出会ったらやばいなあ、とか思いつつ。

ＧＭ　私は、とりあえず、魔道書をもう一度確認しています。で、夕方までに、一区切りついた頃に、一旦外へ出て、少年に会いに。

アル　そうなんだ。（アルに向かって）館を探検するのだね。

ＧＭ　はい。「ここどんな部屋なんだろ？」がちゃっと。

アル　客間は、いくつかあるけど、ほこりりにまみていて、使われていないようです。さすがに、二人ではこの館を管理しきれないようで、使われていない部屋はあまりきれいにされていないようですね。他に、面白いものとしては、書庫とかね。

ＧＭ　書庫？じゃあちょっと、すっと抜いてぱっと…

アル　読めるのかい？（※２０）

ＧＭ　そうだった。

※１９　もうお分かりでしょうが、ジュナンは死んだ家族をよみがえらせてもらうためにミストレスに仕えているのです。

※２０　識字率がそれほど高い世界観ではありません。

アル　「つまんない」。ぽん（と放り投げる）
ミストレス　ああっ、整理してあったのに…（笑）
ＧＭ　台所とか、あとは外の庭園とか、小屋とか。
アル　じゃあ。レヴィンさん、ひとりぼーっと立ってるんですよね？じゃあ、こんこんと。
レヴィン　「はい、どうぞ」。
アル　「あれ？さっきのお兄ちゃん？」
レヴィン　「うっ」
アル　「どうだったの？さっきのおねえちゃんと」
レヴィン　顔真っ赤にしながら、「うまく、いった、かな」といってみよう。どううまくいったのかよくわからないけど。
アル　うーん。「でも、よかったね。おねえちゃんもよろこんでたし。」
レヴィン　（ちょっとあせりながら）「そ、そうだね。ところで君は？」
アル　「僕はアルっていうんだ」
レヴィン　「アル。ああ、そういや名前言ってなかったね。私はレヴィン」
アル　「レヴィンおにいちゃんだね」
レヴィン　「ところでアル、君はなんでここにいるんだい？」
アル　「うん。僕もおにいちゃんと似たようなもんかな。」
レヴィン　「へっ？」
アル　「会いたい人がいるんだ」
レヴィン　「へえそうなんだ、そりゃもしかして、あの、ここの館のご主人様が？でもないのか」
アル　「いえ、あの、違うよ。うん、もっときれいな、」
レヴィン　もっときれいな…。ここのご主人様に目の真ん前でいったら怒るだろうな…（笑）。
アル　「そ、そうだ。僕いまこの館の中、探索してるんだ。お兄ちゃんも一緒にどう？」
レヴィン　「うーん。そうだなあ」。
ＧＭ　外をみたら、外には美しい庭園があるんですけど。
レヴィン　「そうだなあ。じゃあ、あそこの庭にでも行ってみようか？」
アル　「うん。行こう」。じゃあお兄ちゃんの手を引っ張って庭園のほうに行きましょうかね。
ＧＭ　そちらに行った。そこには、ジュナンが頑張ってるんでしょう、毎日、毎日。手入れの行き届いた庭園がある。隅の方にはカーテンのかかった小さな窓つきの小屋がある。
アル　「そこには、お姉ちゃん、じゃなくてあの、貴族の、あの、おばちゃんがいっちゃいけないって言ってたんだ」
レヴィン　「へー、そうなんだ」。
アル　「でも、今日の夜でも、ちょっと僕覗きにいこうかな、なんて思ってるんだ」。
レヴィン　「…チャレンジャーだね…。しかしまあ、すごく手入れが行き届いていて、いい庭だなあ、ここは」
アル　「うん。すごくいい庭だね。たぶんジュナンさんのおかげだろうねえ」
レヴィン　「うーん。ところで、君はいつからここに住んでるんだい？」
アル　今日…今朝。
レヴィン　「今朝きたばっかなんだ」って頭をかきながら（笑）
アル　「ということは、私と同じようなもんか。うーん。じゃあ、お父さんやお母さんはどうしてるんだい？」
レヴィン　「うん。お父さんはもう…」。
アル　「あ、いないんだ」。
レヴィン　「お母さんと二人暮らしなんだ」。
アル　「そうなんだ？」

アル　「じゃあ、僕そろそろ行くね～」
レヴィン　「ああ」
アル　じゃあ、台所の方へむかいまーす。
レヴィン　とりあえず、一通り、館の中の地図みたいなものを頭の中に描きたいので。頃合いをみて、また部屋の中へ帰ります。
ＧＭ　で、台所へ行くと、後片付けしているジュナンさんがいる。
アル　うん。僕、つまみぐいしてます。
一同　（笑）
アル　じゃあ、下に潜り込みながら、もごもごと。
ＧＭ　（ミストレスに）アルがどうしてるか見に行こうかと思ったあなたが、ふと台所に立ち寄った時、そんな光景が目にする。
ミストレス　「そこで何をしているの？」
アル　（笑）。ちょっと喉をつまらせていましょう。
ミストレス　「ジュナン、ちゃんと面倒みるように言っておいたでしょうに」
ジュナン　「昼食の後の、おやつでございます」
ミストレス　軽くため息をつくしかないな。…（アルにむかって）「そういえば、まだ名前を聞いていなかったわね？名前は？」
アル　「アルって呼んで」
ミストレス　「そう。アル、アル…」と、少年をなつかしい姿に重ねあわせながら、見ます。
ＧＭ　（ミストレスに向かって）夢歩きをしてくれるかい？ここで夢歩きできいているのは、善人なのか悪人なのかを聞いています。６足す、１２足す、…２６だね。
ミストレス　やばい。主人の意味が変わりそうだ。
ＧＭ　あなたは、あどけない少年の顔をみていると、ふと、意識が深淵の奥底にと引き込まれてしまう、と（笑）。黄の指輪か。
『我が主人よ、われはこの地上に残り汝の帰還をまつ。千年の歳月にも我は耐えよう』なるほど。夢の奥底に降りてきたとき、あなたは、またあの、女性と出会うわけです。「…後悔しているの？でも、あなたの夢をかなえるためには、何らかの犠牲が必要なのよ。」と諭すように、あざけるように、その夢の奥底でであった何かはあなたに言う。
ミストレス　じゃあ胸をおさえ、「…わからない。自分でもわからない。…でも、もう一度会うためには、そうするしか…」と、つぶやきます。
ＧＭ　「私は千年も地上に残り、あの人の帰還をまっている。だから、あなたの苦悩も理解できる。何かを得るためには、何かを犠牲にしなければならないのよ」、と夢の奥底の何かはあなたに言って、で、（赤いカード（入信）をミストレスに渡す）カードをもらう。で、目が覚めるわけだ。
アル　彼女はどうも呆然としていたようだけど。
ミストレス　「どうしたの？」
アル　「いえ。ちょっと」
ＧＭ　思わず、そう、彼のあどけない顔をみて、なんとなく昔の記憶がくすぐられて、思わず涙ぐみそうになったけど、あなたはその涙をとどめた。
ミストレス　（うつむいていた、顔をあげて）「ちょっと、いえ、そうじゃないの」。と微笑みを浮かべながら少年の方を再びみます。「ちょっと、なつかしい、昔のことをちょっと思い出しただけ」。
アル　「ふーん。そっか。」
ミストレス　「元気があっていいわね、アル」。といいます。
アル　「うん、それだけが取り得」。
ＧＭ　あのね、さっきちょっと言い忘れたんだけど、

ルール解説６
深淵には基本セットについているカードのほかに追加カードの「血の如く赤き」というものがあります。
　通称赤札と呼ばれるこのカードはさまざまな特殊な効果をもっています。

アル　屋敷の裏に馬小屋があるよ。だから、別に、馬で遠乗りして遊んできてもかまわないよ。
ＧＭ　乗馬技能ある？
乗馬は、あります。
いいよ。

ＧＭ　ところでレヴィン、自室に帰ったんだね？
レヴィン　ベッドでねてます。ちょっと、身体の体調が思わしくないんで。
ＧＭ　何もすることがないんやったら、夕飯ぐらいまで思いっきり進めていい？
レヴィン　じゃあ、すみません。判定していいですか。
ＧＭ　ぐはって（笑）
レヴィン　ああ、そうだったね。
ＧＭ　…。なんとか成功。
ティファとジュナンが一緒に夕食の準備をしている。で、ティファがジュナンに向かっていう。「ジュナンさん、もし良かったら、もうそろそろ食事の準備ができたから、アルとレヴィンを呼びにいってくれないかしら。私はご主人様をお呼びするから」と。
ジュナン　じゃあ、行きます。
ＧＭ　扉を開けると、彼は咳き込んでいるんだが。
レヴィン　ごほ、ごほ。吐血してますが。
ジュナン　吐血がどうとかいう前にまずは、「夕食の準備ができました」とまずは言うでしょうね。
（※２１）
レヴィン　「あ、ありが、…ごほ、ごほ。げほげほ」。
ジュナン　「？どうかされましたか？」
レヴィン　「ちょっと身体の調子が悪いみたいで。あの、後で、身体の調子を整えてから行くんで、場所だけ教えてもらえますか？」
ジュナン　じゃあ、説明する。
レヴィン　「ありがとうございます。じゃあ、すいません。先行っておいてください」
ＧＭ　さて、夕食が、すすんでいくわけです。で、ティファは、通いの悪そうな伝書使の顔をにっこりと見詰めるわけだ。（レヴィンに）やっぱり７年前とちょっとティファの雰囲気が違うかな、と思うな。なんというか、妖艶な雰囲気がするかな。
レヴィン　彼女に一体何があったんだろう、と思いながら。
ＧＭ　あなたが思って、彼女の顔をみると、彼女はこう言うわけだ。「おいしい？レヴィン。あなたの為に愛情をこめて、いっぱい、一生懸命作ったのよ」とにっこりと笑う。
レヴィン　「ああ、ありがとう。おいしいよ」
ＧＭ　「そう良かった。たくさん食べて元気をつけてね」とか。
レヴィン　「ああ、ありがとう」（※２２）
ＧＭ　何やら、邪悪な意味を含んだりした気がしないこともないんだが、まあいいことにしよう。
レヴィン　それには気にせず食べてます。体力をつけないとどうしようもないんで。
ＧＭ　「ところでミストレスさん。でしたっけ？すごくきれいな庭園ですね。窓から見させてもらいました」
ミストレス　手入れしてるのは（ジュナンを指して）こっちやけど（笑）。「気に入られましたか？」
レヴィン　「ええ。すごく手入れされていて、なんていうか、みてるだけでも、楽しいところです」
アル　「ほんと、きれいですよね。ほんとに。この食事もおいしいし」。
ミストレス　「それは良かった。それはともかく、レヴィン様は、この館の中を勝手にうろつかないようにと言う風にお願いしてあったと思うの

※２１
そうか？

※２２
このあたりの会話はフ陰気作りで、特に意味はないです、実は。

レヴィン　ですが」、といっておきましょう。（レヴィンをみながら）「よろしくお願いしますね」
ＧＭ　「はあ、すいません。つい」
（ティファ）「ああ、そうそう、レヴィン。私はこれからご主人様と、これからしばらく、ある事にかかりっきりになるから、この館からちょっとでるけど、すぐ戻ってくるから、心配しないでね」
ミストレス　「うん、わかったよ」。
アル　ティファの方に一瞥くれて、軽くうなづきます。
ＧＭ　「おねえちゃん、いってらっしゃーい」
じゃあ夕食終わった。各自、部屋に戻る。で、どうする？まず、貴婦人と、ティファは、食事が終わったあとに、しばらくしてから館を出て行こうとする。で、他は？
ジュナン　…片づけ物にはしばらく時間がかかる。その間、二人はどうする。
アル　僕は、そこの小屋の方に向かいます。
レヴィン　こっちは、ちょっと気になってるんで、小屋に行ってみますかね。
ＧＭ　こ、小屋？君ら、そんな死にたい？（ミストレスに）この人ら、死にたいらしいよ。殺してもいいよ（笑）
レヴィン　まあ、小屋の方へ。
ＧＭ　ま、まあいい。彼女らが小屋に入っていったあと、あなた達は、こっそりと、ドアを開けるのかい？どっちが先に出るんだい？
アル　ぼく…は、何も考えずに、開けて、そのまま外の方に行こうとします。（※２３）
ＧＭ　館のドアを開けたら、すごくでっかい音がするんだが。ジュナンはどうする？
ジュナン　音がしたなら、行きます。
ＧＭ　ジュナンが駆けてくると、少年が外に出ようとしている　と
ジュナン　　捕まえて、し部屋に帰るように戻します。
ＧＭ　「どこに行くのかな？」
ジュナン　えー、捕まえようとすると、彼（少年）の方が先に出てるから当然、判定が必要ですが？
ＧＭ　やりましょう。
アル　つまり、（アルの方にむかって）そちらに、＋４ぐらいの修正で、反応のチェックをして、それに失敗したら、庭園まで駆け込んでくれてかまわないよ。彼を振り切って。
ジュナン　じゃ１２ですね、で、１６。
ＧＭ　１９　　す
アル　捕まえられます。てへ、っとかいう感じで。
ジュナン　駆けていこうとした少年を、あなたはなんとか捕まえることができた。
アル　「どうして外でちゃだめなの？ねえ、おじちゃん」
レヴィン　「うん、それはね、おじちゃんの体にかかわることなんだよ？」と、わけのわからんことをいいながら、連れて帰る。
ＧＭ　「うーん。せっかくぅ。あの小屋に行こうと思ってたのにぃ」
ミストレス　「そんなに暇なら、皿洗いでも手伝ってくれるか？」という。
「うん、いいよ」
「いいのか？」（笑）
「でも、明日こそ行こうかな、小屋のほうに」
…アルを捕まえてるのを見て、やっぱ、今日はちょっと分が悪いな、と思って部屋に戻ります。
（ティファ）「なにやら、ふと、外が騒がしいですね、ご主人様」と小屋の中で。
「まったく。またバタバタしているんでしょ

※２３
全般的にこのリプレイではプレイヤーはかなり積極的に動きすぎの感があります。マスター的にはこれぐらいのほうが楽なのですが。

う」、とちょっと頭をおさえつつ、「では始めましょうか」。

ＧＭ　「そのまえにご主人様。一度、彼に、思い知らせてやった方がいいんじゃありませんか？自分の立場というものを」

ミストレス　ちらり、と目線をくれて。

ＧＭ　と、小屋のすみにある…をみせる訳だ。ちらりと見るわけだ。これがなにかわかる？

ミストレス　ええ。

ＧＭ　「彼を、あれで、思い知らせてやった方がいいんじゃありませんか？もうあと二日しかないことですし、ここに何があるのかは、あの男にだけは、知らせておいてやってもかまわないのでは」とティファはいう。

ミストレス　（考える）「そうね。もう少し、自分の立場をわきまえさせるべきね。」といって、軽くうなずきます。

ＧＭ　「右腕でもふっとばしますか？…どちらにします？」

ミストレス　「娘のことを考えれば、少しは考えを改めるでしょう」。といいましょう。

ＧＭ　じゃあ明日の昼に。

ミストレス　いや、「明日の儀式のときに、ジュナンも連れて、こちらへ来ましょう」

ＧＭ　「わかりました。では明日、彼にみずからの身の程をわきまえさせてやることにしましょう」

一同　（笑）

ミストレス　「まったく。もう少し使えるかと思ったのに」とつぶやいておきましょう。

ＧＭ　うーん、じゃあ、もう一回彼を復活させた時のことを思い出すよ。はい、夢歩きして。

ＧＭ　…１７ね。じゃあ、君は、あのジュナンと初めて会った時のことを思い出す。

ミストレス　自分の、みずからの下僕として、彼を生き返らせたとき、かれをみて、一瞬はっとした。

ジュナン　この、男が、目の前で、連接棍を振り上げ、そして、人の頭を叩き潰すのを、あなたは、ずっと覚えていたからだ。その時「とうさまー」とあなたは言った。今その男が目の前にいる。この男を下僕としてこき使い、そして、いつしか絶望の淵へ叩き落としてやる、あなたは、そう心に決めたことを思い出すわけだ。

『我は忘れぬ、我はあきらめぬ、我は追いつめる』

「…父を殺したあの男、苦しむがいい」。

ＧＭ　そうだったのか（笑）（※２４）

アル　第３章　１３番目の鐘の音

ＧＭ　その日の晩、儀式は夜中まで続きます。さて、（アルに）つかまってもどったんだね？

アル　はい。部屋に連れ帰されるんなら、部屋に戻ります。今度は厳重になるだろうけど、ま、一応部屋の外を（肘をついた格好で）みながら、いないかなー、という感じで覗いてます。

ＧＭ　ふーんそうなんだ。じゃ、夢歩きをしてください。全員。

ＧＭ　では。その日の晩にみた夢です。

ＧＭ　白の八弦琴『伝説こそ語るべし。なぜなら皆を導き、希望を与えるから』

ＧＭ　夢の中、ジュナンは思った。また、今日もいじめられた（笑）。一体おれはなぜこんな目にあってまで、生きているんだろう。あなたの望みってなんやったっけ？

※２４　この情報はミストレスのプレイヤーには与えていましたが、ジュナンのプレイヤーには与えていません。

ジュナン　え？妻と子供の復活。
ＧＭ　妻と子供にいつか会えるならば、このような恥辱にもいくらでも耐えてみせる！とあなたの気持ちを無理矢理言葉にすると、そうなるだろう。
『伝説こそ語るべし。なぜなら皆を導き、希望を与えるから』
希望。いい言葉だね。うん。そしてあなたは深い眠りについたわけだ。明日もいじめられるんだろうな、と思いながら（笑）。
さて、ここで、僕からあなたにカードをプレゼントしよう。…よし、これにしよう。このカードを読み上げよう。えー、ＧＭはこの夢歩きをしたと思った。黄の原蛇「希望？夢？それは一体何を意味するというのだ」。
（笑）
一同　黒の古鏡『汝の為すことはすべて汝に返る。それは忘れるな』か。どういう夢をみる？
ＧＭ　わかんないっす。なんて言ったらいいのか…。
レヴィン　じゃあ、あなたはこれからどうします、これから。明日の基本方針だと思ってください。
ＧＭ　明日の基本方針ですか。えーと、まあ、なんで彼女は、ここに、７年間もここにいるのかっていう理由が知りたいですね。（※２５）
レヴィン　要するに、彼女に詰問するとかそういうことをするかもしれない？
ＧＭ　するかもしれないです。
彼女、がなぜここにいるか調べようとするわけだね？
『汝の為すことはすべて汝に返る』
あなたは、かすかな喜びに包まれながら眠りました。やっと、彼女にあえた。ティファは、３日後の晩には、帰れるって、そういった。
それまでずっと、黙って見ていれば、ティファと、故郷の村へ帰ることができるんだ。そう、眠りに落ちようとした。深い眠りに落ちる寸前に、ふと、あなたは妙な違和感を感じる。ティファはなにかを隠している。何をやろうとしているのか、ティファの涙は何を意味しているだろう？このまま傍観していていいのか？このままティファを追いかけられなかった時のように、僕は傍観しているだけでいいのか？ふとあなたは眠りに落ちる寸前に思った。三日間ただ、安穏とすごしているわけにはいかない。
『汝の為すことはすべて汝に返る。それは忘れるな』
ただ、すごしていたら、なにか悪いことが起きるような、気がする。

※２５　夢歩きのとき、プレイヤーに意図を尋ねるというのは重要なコツの一つです。

ＧＭ　『星座は巡る。これぞ運命の機械からくり』
（ミストレスのほうを見て）ティファと別れて、小屋を出て、夜中の１２時くらいにしましょう。屋敷に戻って自室のベッドで眠る。眠る前に、儀式の最中にあの影と話した会話を思い出す。「もうすぐ、もうすぐだ、そうなる」と影はいう。「おまえの愛しき者に会い、憎き者に復讐し、もうすぐすべてが終わろうとしている」。
ミストレス　「そう、そうすれば、私は、…」
ＧＭ　「では、ひとつ指令を出す。ジュナンとあの子が仲良くなるように仕向けなさい。そうなればこそ、いざ、あの少年に、何が起きるのか知った時に、ジュナンは苦悩に苦しむでしょう」
ミストレス　「…そうね。あの者にふさわしい、あの者にはそれがふさわしいわ」と、暗い笑みを浮かべます。

で、影もにっこりとわらったようだ。「２日後、２日後だ」、と影はそうつぶやく。
『星座は巡る。これぞ運命の機械からくり』今日の儀式を思い出しながら。眠りにつくわけだ。
GM　『我が名前を遠くより呼ぶものは誰ぞ？』
アル　アル君、君はまだ眠くないし、夜中に小屋に行こうとして、隙をうかがってるんやね？
GM　そうですね。（窓の外をみている格好で）こうやってる状況でしたね。
アル　うん。そうすると、夜中に壁掛け時計が鐘をならす。
GM　なんとなく、あなたは、その鐘の数を数え始める。
ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ、ああ、もうそんな時間なんだ、今何時なんだろ、と思いながら、数え始める。
いつつ、むっつ、ななつ、…で、１２回鐘が鳴った。
そこで、ああ、もう１２時なんだ、こんなに遅いなら、もうこんなに遅い時間なんだとあなたは思った。所に、１３番目の鐘が鳴る。…。いま、起きてる状態、なんですよね？
アル　夢歩きは起きてる時の状況でもある。オープニングなんかはそうでしょ（※２６）
GM　で、なにか、館の雰囲気が、おかしい。妙にしんとしている。窓の外を見ると、庭園が光り輝いている気が、する。
アル　庭園のほうに、むかってみますか。
GM　あなたは庭園に向かいます。不思議な雰囲気に包まれているので、館の中を歩いていても、あなたの足音ひとつしない。あなたは驚くほど、静かな音で、扉を開け、庭園へと、出る。
アル　庭園は、蛍、が放つかのように、薄暗く、みずから光を発している。不思議な雰囲気に包まれている。
GM　黄金？…神聖なんですね、それとも、邪悪？邪悪でもないです。神聖でもないです。あえて言うなら、荘厳、ですかね。あなたは、何が起きたんだろうと庭園の方を見ていると、庭園の中から、声がする。「だれ、だれかいるの？」少女の声です。セランじゃないよ。
アル　「うん。僕アルだけど」。
GM　といって、庭園に入っていくんだね？そこには、（ルールブック、白馬を連れた娘の娘を指して）イメージは、こんな感じね。
アル　ああ、女の子ですね。
GM　みたことのない、どっかで見たことがあるような気がするのだけれど、みたことがない。
アル　「アル、アルさんていうの？」そういってあなたの方をきょとんとした目でみる。
GM　「うん。僕アルっていうんだ。」
アル　（少女）「どうして、ここに、いるの？この庭園に入ってきちゃいけないっていわれなかった？」
GM　「ううん。あの先の小屋には行っちゃいけないっていわれたけど？庭園には、何もいわれなかったよ？」
アル　「ああ、そうか。もう夜中だもんね」。
GM　「ええそう。でもなんでこんな所にいるの？」
アル　「わたしは、身体が弱くて、日の光に当たると、身体に良くないの。だから夜しか出られないの」
GM　「そうなんだ」
アル　「だから、夜しか外を出歩けないんだ」
GM　「ふーん」
アル　「おにいちゃん、この近くの村の人？」

※２６
幻視でも回想でもなんでもないシーンを夢歩きで処理することもありえます。重要なことは、テーマカードによる暗示と、中心にいるＰＣが誰かをはっきりとさせることです。
　なお、ここでの１３番目の金の音は、「八弦琴の時」という意味と、「もうひとつの時間」という位階を表す意味の二つの意味を持たせています。

GM　「うん。ここからちょっと。歩くと距離があるんだけど、この近くの村出だよ」
アル　「わたし、あの小屋の中で療養の為に、ずっと暮らしているの。昼間、外に出られないし」
GM　「ふーん。そうなんだ」
アル　「日の光を浴びるわけにはいかないの」
GM　「そうなんだ。僕今日、うん、その小屋に行ってみようと思ってたんだ。そこに、君はずっといるんだね、いつも」
アル　「ええ、そうよ」
GM　「ふーん。ところで。名前は何ていうの」
アル　「名前？ミレーヌっていうの」
GM　「ミレーヌ…ふーん」
アル　「おにいちゃん、もし良かったら…」
GM　「うん」
アル　「わたしずっとひとりでさびしかったの。遊んでくれる？」とかいうてくるけど？
GM　「うん、いいよ」
アル　「友達もいなかったの。さみしかったの。あのおばさんは外にでちゃいけないって言うし」
GM　「そっか。あのおばさん、陰険そうだもんね」
アル　「それに、外の人と会ったら、悪い病気をもらうかもしれないから、会っちゃいけないっていうの」
GM　「悪い病気になる、の？」
アル　「ん。ここは、空気がきれいなところだから、外の人が病魔を持ち込むんだって」
GM　「ふ〜〜ん。身体が弱いんだ。そっか。僕も、会いたい女の子がいるんだ」
アル　「なんて名前の子なの？」
GM　「セランっていうんだ」
アル　「きれいな子なの？」
GM　「うん。そう。とても」
アル　「で、遊んで、時間がたったということにしてよろしいでしょうか？
GM　はい、どうぞ。
アル　で、「あ、そろそろ戻って、もう、寝なくちゃ」
GM　「うん」
アル　「また、明日会いにきてくれる？夜だったら私も外に出られるから」
GM　「また、明日の夜、行くね」
アル　「昼間は近寄らないでね。おばちゃんに怒られちゃうから」
GM　「そうだね。うんじゃね」
アル　といって戻った。で、部屋に戻ると、この不思議な雰囲気は消え去る。で、あなたは再び、眠りにつく。
GM　『我が名前を遠くより呼ぶものは誰ぞ？』
あの小屋の中にあの子はいたんだな、ということをあなたは知るわけだが、なにかに呼ばれたような、気がする。

――――――――――（2日目）――――――――――

GM　さて、朝です。朝です。カードを6枚まで補充してください。
アル　とりあえず小屋の中に何があるかわかったね、君は。
ジュナン　はい。わかりました。
GM　ぼくは知ってるのかねえ。
レヴィン　うーん。どうなんでしょう。さて、朝になりましたが、みなさまいかがいたしましょうか。
ジュナン　とりあえず、身体の体調はよさそうです。
GM　朝は朝食の準備、と。こればっかりだね。そうだね。早起きして朝食の準備をするわけだ。

アル　うーん。朝か…。やっぱり馬かな、うん（ぼそり）。

ＧＭ　とりあえず、朝食の準備が終わって、朝食のいい匂いがしてきたが。で、ティファが皆を起こしにまわったりするわけだ。「みなさん、起きてください。朝食の準備ができましたよ」と。洗面器と、タオルなどを持ってきてくれる。そんな待遇を受けたのは初めてなので、ちょっと感動を受けたりなんかする。で、（レヴィンに向かって）「あなた、起きてちょうだい」とか言って起こしてくるわけだ。はははは（笑）

アル　「おはよ、ティファ」

レヴィン　「もう朝よ」、とか言って、洗面器とタオルを渡してくれる。

ＧＭ　「あ、ありがと」

レヴィン　「朝食の準備ができてるから降りてきてね」

ＧＭ　「うん、いますぐ行くよ」

レヴィン　じゃ、食堂の間に集まる。なんかすることある？ないね、朝食はそのまま終わる。で、どうする？

ＧＭ　とりあえず、少年に「昨日は眠れたかい？」

レヴィン　「うん、ぐっすり」

アル　「なんか、いい夢でもみたのかい？（笑）」

レヴィン　「うん。すごく、かわいい女の子と会ったんだ」（※２８）

アル　え、言うの？…（ミストレスに）じゃ、どういう反応します？

ＧＭ　「え？…女の子に会ったの？」

ミストレス　「うん。でも、夢だもん」

アル　「そう」。と言って、考える。「ちょっと後で、私の部屋にきてくれるかしら？」といいましょう。

ミストレス　「うん？うん、いいよ」

※２８
このあたりのアルのプレイヤーのかまのかけ方は非常に上手いです。
また、ＰＣ間の関係作りという点からも良いロールプレイですね。

アル　で、食事が終わった後、一言ジュナンに声をかけときましょう。「食事の用意とかはティファにやらせるから、おまえは、アルにつきあって、あの子の面倒をみなさい」

ミストレス　はい。

ジュナン　「じゃあ、悪いけれど、私は先に部屋に戻るから、アルを呼んできてちょうだい」、といいます。

ＧＭ　（ティファ）「あなたは今日はどうするの？」

レヴィン　ときいてくるよ。

ＧＭ　そうだな。もし、できれば、うん、僕の馬の調子を見に行きたいんだけど、だめかな。

ジュナン　じゃ、ジュナンがアルを呼びに行く。

アル　「じゃ行こうか」。

ＧＭ　「うん、行こっか。おばちゃんも呼んでることだし」

ジュナン　と言って、おばちゃんの部屋に（笑）、連れていかれる。

ミストレス　「お連れいたしました」。

アル　「寝心地はどうだった？」とききましょう。

ミストレス　「うん、すごくふかふかだけど、ちょっとふかふかすぎて。いつものふとんじゃないから、あんまり、うん、」

アル　「…夢をみたみたいね。女の子の夢を見たといったけれど、どんな夢だったの？」

ミストレス　「どんな夢って、きれいな女の子と、会った、んだけど…。うん？」

アル　「どんな夢をみたの？」

ミストレス　（ごまかして）「うん。夢の中で、セランと会う夢をみたんだ。そうそう、それですごく楽しかったんだ」

アル　「そう」…。「まあ、今日はいい天気だし、」

ミストレス　「うん、今日は、馬に乗ってちょっと、駆けてみようかな、なんて思うんだけど。馬、貸

ミストレス　してもらってもいい？」
「ええ、もちろんよ。まあ、ひとりじゃ、味気ないでしょうから、ジュナンも一緒に行ってくれると思うから」、と（ジュナンをみて）目線を向ける。
アル　「うん。おじちゃん、一緒にいこうか」
ジュナン　少年の方は向かないけど、…ミストレスに向かっては、「はい」
ミストレス　「あなたも、この年頃の子供と遊ぶというのも久しぶりでしょうしね」、とつぶやきながら、退出しなさい、と目線で合図しましょう。
GM　あとは、そちらを見ません。
ミストレス　じゃ、ま、とりあえず、ここで確認するけど、
GM　（ミストレスに）部屋にいる？
います。
部屋で、自室で、本を読んだりしているんだね。で、二人は遠駆けするつもりなんだ？じゃ、遠駆けは後回しにしよう。

じゃあレヴィンのシーンにしよう。
レヴィン　とりあえず、ティファに、暇な時間ができたら、話がしたいので、会いに行く。
GM　何やら自室で本を読んでいる。棚には難しそう～な、本が並んで、彼女は本を読んでいる。
レヴィン　「あれ、どうしたの、レヴィン」
「あ、いや、えーと、ほら、なんていうかな、久しぶりにあったから、なんか話をしにこようかな～、なんて」
GM　「そうなの。…まあ、いいわ、どうぞ座って」
レヴィン　「しかし、びっくりしたよ。いきなり、唐突に7年前に、僕の前から消えるんだからさ。…何があったのか知らないけど」
GM　「ずっと、私は探していたんだけれど、…7年は長かったわね」
レヴィン　「？それだけ、…僕が寄り道をくった、ってことかな」。なんてま、笑い飛ばしながらいいますけど。
GM　「あなたの前から、急に去ってしまってごめんなさい」。とかいう風に彼女はいう。
レヴィン　「しかし、難しそうな本を読んでるね」
GM　「ええ。私はずっと、こういう知識を得るために旅をしてきたのだから」
レヴィンPL　「へえ」
それは読めそうですかね、僕は。
GM　ん？どーせ、よめないだろうと、彼女は開けたままだけど、魔法知識ある？
レヴィン　ないです。
わからない。蛇がのたくったような字だ。
GM　はあ。「…しかし、一体ここで、何をしようとしてるんだい？」
レヴィン　「それは、聞いちゃ駄目って、言ったでしょ？」（にっこり）
GM　「あ、ととと、そうだったっけ」。はあ。
レヴィン　「…散歩でも行く？」とかいう風にいってくるけど。
GM　「ああ。そうだね、行こうか。さすがにずっと部屋の中にいて、ちょっと身体を動かそうかな、とか思ってたとこだし」
レヴィン　「この森のはずれに、ひとつ、珍しい石碑があるの。そこまで散歩しに行ってみる？」
GM　「いいね」。じゃ、そこに言われたままに行こうと。
レヴィン　そこにはたしかに石碑がある。
GM　「これは？」
レヴィン　この石碑がどんな感じかというと、よくあるような石碑と、そのまわりに、まあ、ちょっと小さな石が円状に立っている。で、その石には、なにやら字が彫ってあったりする。

レヴィン　じゃ、その字を読もうとします。
ＧＭ　石碑には人の名前が書いてある。
レヴィン　人の名前？なんてかいてあるんでしょう？
ＧＭ　いろんな人のたくさんの人の名前。
レヴィン　「これは一体…」
ＧＭ　この遺跡には無数の人の名前が彫られている。「私はここで、あのひととであったのよ」
レヴィン　「あのひとというと？」
ＧＭ　「ミストレス様。…もう、ここで、死ぬしかないかなって…」。さて、ここで、地域知識。この遺跡がなんなのか。目標値は１０でいいです。
レヴィン　はい。…（カードを出して）１５で。
ＧＭ　この森の奥にある、石碑がなんなのか、伝説を思い出した。

遠く離れた恋人たちが、いつの日か再会するために、でも、もうたぶん、力尽きてしまって会えないようなひとが、この石碑の下に埋めて、と墓守りに頼む。相手も自分に会いたいと思っていて、そして、この石碑の下に埋めてもらったならば、死んだあと、恋人たちはまた、会える。そういう、伝説の残る、石碑。（※２８）

※２８
この石碑は私のセッションには翼登場する物です。

レヴィン　はあ。ここがね。
ＧＭ　「もう私はここで死ぬしかないかな、とも思ったのよ」。
レヴィン　「な、なぜそういう事思ったんだい」。
ＧＭ　「だって…」、夢歩きをしてくれるかな？１５以上でＯＫ。
レヴィン　うーん、これかなあ。（黄の牧人のカード）。じゃ、縁故足して、ティファのことを思いましょう。１７。
ＧＭ　『我はここで待つ。汝の時がいたるのを』
レヴィン　その時、あなたの意識に語りかけてくる声がある。女性の声だ。「真実が知りたい？一体、昔ここで何があったのか」
ＧＭ　黙って。心の中で、「真実が知りたい」と。
レヴィン　「ここで一体何があったんです？」
ＧＭ　（女性の声）「真実を知っても、後悔しない？」（※２９）
レヴィン　「…。しません。」
ＧＭ　『我はここで待つ。汝の時が至るのを』。
ミストレス　これはほんとにあった事。５年前に本当にあった事。とその声が言った途端、あなたは、こんなビジョンをみる。
ＧＭ　（ティファ）「私はずっと、彼のために、彼がずっと私と一緒にいられるように、彼が、彼の、彼を回復させるために、ずっと旅してきた。だけど、もう見つからない。もしかしたらもう、彼は死んでしまってるかもしれない。私もここで死ぬしかないのね」と言って、手首にナイフをあてようとする。しかし、そこに、後ろから声がかけられる。
レヴィン　「おまちなさい」
ＧＭ　「自らの命まで捧げようというのならば、あらゆる望みはかなえることが、できます。私と一緒に来ますか？もっとも、人ひとりの命を救おうというのだから、それ相応の代償、いえ、それ以上の代償が必要になるかもしれませんよ」。…そして、彼女はうなずき、今に至る。で、ふと現実に戻ったあなたに、（ティファ）「どうかしたの？」ときいてくる。
レヴィン　「あ！い、いや、なんでもない。いや、どうやらめまいがしたみたいだ」

※２９
難度も登場する女性の魔族ですが、彼女のこの矛盾した態度は魔族特有の反応です。
妄執故に、あるいは未練故に魔族たちの心は両義的に引き裂かれているのです。
この魔族の場合は、叙事詩を作る、というのが最大の目的になっています

ＧＭ　で、嘲り笑いが、聞こえてくるわけだ。彼女にはきこえないが。（女性の声）「真実を知って、後悔した？」
レヴィン　「（いや。むしろ真実を知って、良かったと思ってるよ）」
ＧＭ　（ティファ）「戻りましょう？」
レヴィン　「そうだね」

ＧＭ　時間を進めましょう。２時ぐらい。、遠駆けの方はどうなっているかな。
アル　どーなるんかな？２頭、あるんですか？
ＧＭ　あります。
アル　あ、じゃあ、僕は先行して走っていくけど。
…馬術はもってるもんなあ。
ジュナン　僕か？…動物知識がない…。
アル　じゃあ、追いついてくる感じがしたら、「あの、ジュナンおじさん？この先で、いい目標ある？馬を遠乗りするのに」
ＧＭ　あるよ、きれいな泉とかね。
ジュナン　じゃあ、そっちに向かって先行して走るけど、ゆっくり。
アル　（笑）じゃあ、ある程度、手加減しながら。ゆっくりめで行きましょうかね。
ＧＭ　ああ、わかりました。さて、じゃあ、遊びながら、…夢歩きをしたまえ。
ジュナン　…１０。
ＧＭ　『耳元にささやくものあり。これもまた夢なりや？』
あなたは道を少年と駆けながら、なつかしい声を思い出す。
「とうさん、こっちよー」
昔、とおい昔、家族でピクニックに行った時の思い出だ。
アル　「おじさん、こっちだよー」

ＧＭ　子供と遊んでいると、その時のことが、ふと思い出される。
アル　「おじさん、馬へただねー。まったくー。そんなんじゃ、いいおとうさんになれないよ」

ＧＭ　では、時間を進めます。３時。みなさん館に戻ってきました。で、夕食までなんかします？疲れてるから、ぼーっとしてるかい？
ジュナン　馬走らせたから、馬の世話かな。
アル　うーん。僕はジュナンさんと一緒に馬の世話手伝いましょうかね。
ジュナン　じゃ、毛並みを整えよう。「おまえ馬乗るの上手いねー、今度教えてもらおうかねー」、とかいいながら。
アル　「うん。教えてあげるよ」

ＧＭ　（レヴィンに）君はどうする？
レヴィン　じゃ、夕食待ってようかな。そろそろ吐血の時間かな、と思いつつ。
ＧＭ　（笑）
レヴィン　じゃ、判定をどうぞ。
ＧＭ　今日はまだ二日目やから判定は＋１や。
ジュナンＰＬ　あ、だけど、…わるい。なんかね。悪化してるよ。
ＧＭ　は？
レヴィン　悪化してるんよ。館にきてからどうも。
ＧＭ　というと？目標値１３とかになってます？
レヴィン　１３でしてくれる？
ＧＭ　８の、…えーと、（カードを使用）１７で乗り切っときます。

ＧＭ　さて。夕食の時間になります。
レヴィン　今日は吐血しなかったな、夕食たくさん食べて、夜中に備えよう、とか思ってます。

ＧＭ　（ティファ）「きょうはずいぶん顔色がいいのね」
レヴィン　「ああ、ここにきてから大分ね」
ＧＭ　「食事がおわったら私は、ご主人様と一緒に外に出るけど、ついてきちゃ駄目よ」
ミストレス　「そうそう。今日は、ジュナン。あなたも来なさい。」
ジュナン　「は」
アル　「じゃ、僕もいっしょにいくね。」
ミストレス　「ごめんなさい。あなたは部屋でゆっくりとしているといいわ。ちょっとあなたにはむつかしい事だから。」
アル　「ふーん。そうなんだ。…どこ行くの？」
ミストレス　「それはね。ひ・み・つ。」
アル　しょうがないな。…わかりました。尾けます。こっそりと。
ＧＭ　忍び歩きの判定をしたまえ。
レヴィン　私は、今日はこの３人が出ていくってのを知ったら、まあ、屋敷の中を色々と調べましょうか。
ＧＭ　わかった。
ＧＭ　じゃ、反応対決にしよう。（アルに）判定をどうぞ。他の全員は反応で。気がつくかどうか。
アルＰＬ　対抗ですね。
ＧＭ　対抗判定。ひとりでも成功したら、駄目だよ。
アル　これ、出して、２０。
ジュナン　勝てるか、そんなもん。
（そしてだれも成功しなかった）
ＧＭ　じゃ、こっそりとついていく。彼女２人と彼ひとりは、小屋へと入っていく。
アル　小屋って、例の小屋ですか？
ＧＭ　ミレーヌが、住んでいる、といっていた小屋。聞き耳たてて、声きこえますか。
アル　ＯＫ。反応で１０以上。
ＧＭ　１１ですね。成功です。
アル　わかりました。（ティファ）「では、ご主人様、どうぞ」とドアを開ける。「ジュナンもどうぞ入りなさい」と言うよ。
ＧＭ　「ついてきなさい」
ミストレス　「はい」
ジュナン　ティファを連れて３人で入る。（ジュナンに）さ、夢歩きをしてください。
ＧＭ　ん？ん？…成功。
ジュナン　『熱意の生きられる場所は限られる。狂気こそ必要』（赤の青龍）なるほど。
ＧＭ　あなたは、それを見た瞬間に。狂気の叫び声を、思わずもらす。うっ、と。一瞬、気が遠くなりそうになる。小屋の中には、一面に、なにやらチョークのようなもので、円がひかれているようだ。そして、壁の背には、大きな水槽がふたつ立てかけられている。…わかるかな？
ジュナン　水槽？
ＧＭ　水槽。ちなみにその水槽は人がはいれるくらいの水槽だ。水槽の中には、実際、人が入っているらしい。ふたり入っているね。
ジュナン　一個にひとり？
ＧＭ　うん。見たことがある人。なにかつぶやきます？
ジュナン　…みたことがある人なの？
ＧＭ　見たことがある。２０年前くらいかな。
ジュナン　！！それは、大人の女性と子供の女性？
ＧＭ　そうそう。だいたいそのようなものですね。
ジュナン　ああそうそう、このカードをあげよう（赤札の狂気）それをみた瞬間に…。

ジュナン　「ふ、ふふ、…ふふふ、…」。
ミストレス　ふ、と振り返って微笑みを浮かべます。
ＧＭ　（ティファ）「ジュナン、あなた最近、たるんでいるんじゃないかしら？。ねえ、ミストレス様」
ミストレス　「あなたは、自分の望みを忘れた訳ではないのでしょう？あなたは、なんのためにここにいるのか、もう一度自分自身に問い掛ける必要があるのではないかしら？」
ジュナン　何も言えない。
ミストレス　「これが、おまえの望むものなのでしょう？…会いたいのでしょう、もう一度？」
ＧＭ　（ティファ）「もうすぐ、明日になれば、会えるのよ」
ミストレス　「あなたは、この者たちと、もう一度会うことを望んでいるのでしょう？」
ジュナン　「はい」
ミストレス　「そのことを肝に命じておきなさい。そして」
ＧＭ　「とりあえずご主人様。彼に自らの立場を思い知ってもらうためにも、右手の小指など、いかがでしょう？さすがに拳までいくと、復活したあと、生活するのに不便でしょうから。ま、指一本くらいなら、さほど不便でもありますまい」と、恐ろしいことをいっているが。
ミストレス　「そうね。どちらかといえば、娘の方がいいでしょうね」と、（ジュナンに）ちらりと目線をくれます。
ジュナン　「私はともかく、娘だけは…！」
ＧＭ　「どうなさいます？」
ジュナン　「…」
ＧＭ　「…覚悟が足りないようですね。」
ミストレス　「そうですか、わかりました。じゃあ、私におまかせくださいますか？」とか言ってるよ。
ＧＭ　彼女は、なにかを唱えようとする。すると、水槽が、ぼこぼこと水飛沫を上げる。彼女はまだ唱えている。どうする？そろそろ彼女が、呪文を完成しようとするが？
ジュナン　とめられるなら、とめたい。
ＧＭ　詠唱をやめさせるために口をふさごうとする。
ティファはにっこりと笑って、「ここまで必死になって止めているのですから、今宵は見逃してあげてもよろしいのではないでしょうか？」
ミストレス　そちらの方へもう一度目線をくれるけど。
ジュナン　平伏してます。
ＧＭ　えー、では、レヴィン。
レヴィン　はい。
ＧＭ　彼女は、あれから7年経ったんだ。彼女はいろんな、世間の暗部を見てきたんだよ。わかるかい？わかるね？
レヴィン　わかりますよ。
ＧＭ　ということで、ひざまずいた、君の顔の前にティファは足を置いた。
レヴィン　へっ？
ＧＭ　足を差し出した。何を意味してるかわかるかな？
レヴィン　へっ？へっ？
ＧＭ　彼の顔の前に足を出す。で、忠誠のしるしに、いやだ、これ…。
レヴィン　彼女はあれから7年たったんだ（笑）
ＧＭ　わかってますよ、わかってますよ、わかって…。
レヴィン　さあ、どうするかい。恐いけどいいシーンだ、恐いけど（笑）
ＧＭ　キャラクターは見てないからいいですけどね。（※３０）
※３０　いいのか？（笑）

ＧＭ　で、彼女が要求している行為をするのかい？（笑）
ジュナン　しましょう。
ＧＭ　わかった。あえて描写はすまい。じゃあ、帰りましょうか。
アル　あ、じゃあ、帰るような雰囲気になったら、さくさくとその場から離れます。
ＧＭ　（レヴィンに）ここで少し場面転換をしよう。君はその頃、あの故郷での、ティファの、無垢で清純だったティファとすごしていた日々を、思い出している。だが、その頃ティファは一方…やれやれ（笑）。館の中でなにかないか探します。
レヴィン　うーん、どこを探るんですか？夜中の１２時まで帰ってこないことにしましょう。
ＧＭ　ご主人様の部屋っていけますかね。
レヴィン　まあ、一応。
ＧＭ　じゃあちょっと入ってみます。
レヴィン　そこは、書斎になっている。机の上には、何やら、何やら、書きかけの本なり、書きかけの羊皮紙なりがある。
ＧＭ　じゃ、読めそうなもんをちょっと読んでみようかな、と思います。交易語で、書かれてそうな本を探します。
レヴィン　どれくらい時間かけて探す？いま７時。
ＧＭ　７時。じゃあ、３時間ほどかけて。
レヴィン　探す。で１時間ほどで彼（ジュナン）は戻ってくる。で、呆然として、館に戻ってきたあなたは、主人の、部屋から、…（レヴィンに）意志で抵抗して１０以上だったら成功。あ、対抗ロールにしよ、反応と反応で。
ＧＭ　じゃあ行きま～す。（ころころ）。えーと、７の、５で１２です。
ジュナン　１１。
ＧＭ　隠れられた。
レヴィン　ふう。
ＧＭ　で、どうする？
レヴィン　じゃあ…、まあ、誰が帰ってきたかわからへんけど、帰ってきたって事は、うーん、ちょっとこれはやばいかもしれないな、と思う。多分、この時間内に探せた本ってありますかね？
ＧＭ　交易語の本を１冊探せた。交易語でかかれてる、ということぐらいまでわかるが。
レヴィン　もってかえるかい？
ＧＭ　やめときます。仕方ないから、出よ（笑）。
レヴィン　これ以上は時間がかけられない。
ＧＭ　わかりました。じゃあ、夢歩きをしたまえ。
ジュナン　（独り言）やばい～、やばい～。やばいっすよ。えーと、９、９の１０でこれで。
ＧＭ　失敗。
ジュナン　狂気を出したんだよね？狂気を出したのなら、夢歩きとは別に、狂気に走ってもいいよ。
ＧＭ　あ、縁故つけていいよ。縁故５足したら１０超えるよ。
ミストレスＰＬ　そうか。死んだ家族の夢なのか。
一同　あーしかし、まさか、跪いて靴をなめるとは思わなかった。
ＧＭ　いやー、まさか、跪いて靴をなめろと言うとは、思わなかった。
ジュナンＰＬ　（笑）
ＧＭ　言ってはいないよ。跪いているあなたの前に靴を出しただけや僕は。
ＧＭ　でも、それを理解して、やれ、と言ったような。
ジュナン　ええ話やね。
ＧＭ　はい。じゃあその日の晩の夢歩き。

（ジュナンのほうを見て）『このカードには意味がない。そう意味がない、多分…。いつかおまえは私を求めるだろう』

ジュナン　眠りについた。夢の中、真っ暗だった。闇の中、少し光がともる。その光の中には、愛する妻と子の姿が見える。あそこに行きたい？と何かがささやく声で訴える。なにかの声が君の耳に届く。

ＧＭ　…。近寄れないかな？

ジュナン　あそこに行きたい？って何かがきいてきた。

ＧＭ　闇の中の光の中に、妻と子の幻影が見える。あそこに行きたい？と聞いてくる。名を呼びながらそっちに向かい歩こうとします。

そこに、行くためには、プライドも、勇気も、愛情も、良心も、倫理も、あなたが今まで培ってきた全てのものを捨てなければいけない、としても？…。と、言った時に、あなたは、狂ったように笑いながら光の方へ走っていった、でいいでしょうか？狂気だからね。

ＧＭ　『友よ、これがおまえの言う理想というものか、単なる愚考に過ぎぬ』

（ミストレスに）さて、闇の中、「儀式はもう、明日だな」、と、階段の底から闇の声がする。

ミストレス　「明日ね」

ＧＭ　「そう、明日に、明日に、星の位置が整えば。ところで今宵は、あの者を、こっぴどくやったようだな」

ミストレス　…「あのものに、ふさわしいわ」

ＧＭ　「星の位置が、正しい位置に近づきつつあって私の力も増している」祭壇の上で影がいう。

「いまなら、もう、この者達をよみがえらすことができるわ。どうする？全てを知らしめたあと、あらゆるプライドや良心、あらゆるものを捨てて、この館から、あの男を放逐するとするか。真実をしらしめたあとに」。と闇がいってくる。

ミストレス　『これがおまえのいう理想というものか。単なる愚考に過ぎぬ』

ＧＭ　「…それもまた一興」。

アル　（アルに）さて夜です。１２時過ぎたよ。鐘がまた鳴りひびく。（※３１）

ＧＭ　１３番目が鳴るんですね。小屋に行きます。

アル　（少女）「約束通り来てくれたの、お兄ちゃん」、とミレーヌはいう。「どうかしたの、そんなにぼうっとして」

ＧＭ　「ん」

アル　一体あの小屋の中で聞いた声は何だったんだろう、とあなたは思った。「どうしたのおにいちゃん、ぼうっとして」

ＧＭ　「…ん。そういや、なぜ、ここに、いるの？」

アル　「私、昨日もいったけど、身体を壊して、身体を壊してずっと外に歩けなかったから、ここで、空気のきれいなここで、身体を治しているのよ」、という風にいうけど。「昨日いったでしょ」という風にいう。

ＧＭ　「もうすぐ治るの、身体は？」

アル　「んー、どうかな、わかんないけれど。でも、ちょっとづつ良くなってるって、あのおばちゃんは、お医者様はいうよ」

ＧＭ　「ミストレスさんのことですか？」

アル　「ん？ミストレス？あのおばちゃん、そんな名前なんだ」という風にいうけど。

ＧＭ　ち、ちょっと待ってください。おそらく状況が把握できないだろう。

※３１　アルのプレイヤーは、この小屋の中に本当は何があるのかについて混乱しています。このシーンのあせりぶりはそれ故です。

アル　ええ
GM　「おにいちゃんどうしたの？なんでそんな変な顔してるの？昨日みたいにもっと遊んでよう」、とかいうけど。
アルPL　うう…。あぁ～、わからんけど（小声で）。
GM　わからんだろうな。
アル　彼女をともかく、抱きしめます。
GM　「ど、どうしたの、おにいちゃん」
アル　「大丈夫だよ。僕が守ってあげるから」
GM　ふーん。「何があったの？まあ、いいや、昨日みたいに遊んでよ」、とかいう風にいうけど。「おにいちゃんいたいよ、あんまりしめたら」、とかいうけど
アル　うん。じゃあ、一緒に遊びます。
GM　はい。じゃあ2時間くらいたったということで、「もう、戻らなきゃ」、といって小屋に戻ろうとしますが、よろしい？もう戻りますか？なんかする？
アル　あの、明日の晩ですよね。
GM　明後日の朝には、君は、すべて終わって、もう帰っていいよ、と言われる予定になっている。明日の晩になにかをするらしいんだがな。この人達は。
アル　…（考え中）。「僕とどっか…いや駄目だ（小声で）。ひとりで、この小屋にいるのかい？」
GM　「うんそうだよ」
アル　「ほかに、誰もいないの？」
GM　「たまに、おばちゃんがきて、ごはんを持ってきてくれたり、するけど」
アル　「ほんとにひとりなの？」
GM　「そうだよ。なんでそんな変な顔してるの？」
アル　え、（決意したかのように）戻ります。
GM　さて時間が経ちました。「もう、戻らなきゃ」、と最後に一言、ひとことだけ聞けることにしようか。どうする？
アル　「僕と一緒に、この屋敷から、一緒に」
GM　それを言うんだね？じゃあ、そもそもこの館にくる原因となった一言を彼女はいうよ。
アル　「駄目だよ、だって、おにいちゃんもわたしも、まだ子供じゃないか。ふたりじゃ、暮らしてなんかいけないよ。私はこの館でしか生きていけないんだもの。わたしもおにいちゃんもまだ子供だから、力がないの。そうでしょ？」と走ってもどっていきます。（※32）
ミストレス　・・・
GM　私は、「それもまた一興」とつぶやきながら、でも胸をおさえつつ、立ちすくんでいます。なにやら、最近、昔の夢が、昔のこと、夢が、ふと、思い出されてくるわけですね。
レヴィンPL　さて、
GM　『すべては流転する。変化それ自体は歓迎すべきことなり』
レヴィン　（レヴィンに）彼女がなんのためにこの館に来たのか、もうわかってるのか？
GM　なんとなく。
レヴィン　あなたは、眠りにおちいる。そして、ふと、夢の中で、目覚めるわけだけどあなたは今、膝まで、葦が生い茂った、はらっぱの真ん中にいる。
GM　はい。「ここは…、どこだ？」
レヴィン　「あなたなの」という声がする。その、声の

※32　少年というテンプレートの基本は、ここにも出てくる無力さ、です。よくこれを覚えていてください。
（もう一つ、知らない画ゆえの強さ、もあります）

する方をみると、あの石碑がある。
レヴィン　「なぜこれがこんなところに」
ＧＭ　そうつぶやくと、その石碑の所から、ティファがゆっくりと歩いてくる。
レヴィン　じゃあ、大声で、手を振って言ってみましょう。「ティファ～」
ＧＭ　「ああ。やっと、ここに、きてくれたのね」
レヴィン　「ああ」
ＧＭ　「長い間、旅をするのは疲れた。やっと、ずっと、ここで永遠に眠れるのね」と彼女は呟く。
レヴィン　「永遠に？何をいってるんだ。今から、町へ戻るんじゃないか」
ＧＭ　彼女はあなたの事を抱きしめる。ふと、世界が闇に包まれる。
レヴィン　「な！？」
ＧＭ　ゆっくりとゆっくりと、日の光はうすれていき、世界は闇になっていく。
レヴィン　「これは？ティファ？」
ＧＭ　「わからないの？これは、いまから、確実に起きることの予言」。女の人の声だ。
レヴィン　「いっ」
ＧＭ　「いつかは誰も絶対に死ぬ。これは近い将来起こることの予言。つらいのでしょう？さあ私と共にいきましょう」、と闇の中から何かが囁きかけてくる。「彼女と一緒に私の腕の中で、永遠に眠りましょう」、と闇の中で影が囁く。どうする？
レヴィン　「ふざけるな！」と。「ふざけるな！俺はこんなことなんか望んではいない。俺は彼女と普通に、彼女と町に戻って普通に暮らしたいだけなんだ。誰がこんなとこで永遠に眠れるものか」
ＧＭ　「ほんとう？ほんとうなの？」胸に苦しみを覚えますが。
レヴィン　「う、ぐっ。」
ＧＭ　「生きることは苦しいことよ、つらいことよ。ここならもうずっと、平和でいられるのよ」と彼女は、いう。さて。意志力で抵抗したまえ。１５以上。
レヴィン　ええ、追加カード…、いいや、寿命を使ってやる。…１０の、５年削ります。こんなとこで突っ伏してたまるかあ！」
ＧＭ　わかった。あなたは、その深い女の声をもった何かに、屈しようとしたが、こんな声をきく。（ティファ）「お願い、死なないでレヴィン、あなたが死んでしまったら、私はどうすればいいの？」これは、現実の世界で、彼女が言っている声じゃないかな、と思った。
（女性の声）「大丈夫。あなたが死んでも、彼女はすぐあなたのことを忘れてしまう。いつかはあなたと同じところにくるのだから。なぜ、苦しんでまで生きようとするの？なぜ苦しんでまで、つらい世界を生きようとするの？あなたの生きる理由は何？」ときいてくるよ。
レヴィン　「彼女が生きてるから僕も生きてるんだ。それに、いままで７年間のことを、無駄にしないためにだ！」
ＧＭ　では意志力で判定をしたまえ。今度は１０でいい。
レヴィン　成功です。
ＧＭ　はっと目を覚ます。涙で、顔をくしゃくしゃにした、ティファが、あなたの枕元で、あなたをゆすっています。「よかった、生きていてくれたのね」、という。ベッドを見ると血まみれです（笑）（※３３）
レヴィン　わあっ。

※３３　このシーンは夢歩き描写の応用例の一つです。戦闘中はじめ、死に際の幻は夢歩きの良い使いどころです。
なお、「あなたの生きる理由はなに？」と言うせりふは、魔族の問いかけとして私が多用するものの一つです。

ＧＭ　これから先、病魔の抵抗が、目標値１５にしてください。
レヴィン　「い、いったいこれは…」。きょとんとしてますね、多分。
ＧＭ　いやー、病魔が一気に進行したんだよ。
レヴィン　うぁあ。そうか。「ごめん、ティファ。迷惑をかけたね」
ＧＭ　「生きていてくれればそれでいいの」、と彼女はいうけどね。さて、朝です。カードを補充しましょう

第４章　儀式
ークライマックス部

ＧＭ　朝食の場になります。で、ティファがいう。
「すいません、レヴィンが体調を崩してしまって、伏せております」そして、少年の方をみて、「それにしても、もう今晩ですね。今晩になれば、あなたも望むものが手に入るはずよ。すべて、その時に明らかにしてあげるから、」と呟く。何かを、押し殺すかのようにいう。
アル　んんん。レヴィンのお見舞いの方に、僕は食事が終わったらいきまーす。
ミストレス　…見舞いというか、様子を見に行きます。
ＧＭ　じゃあふたりで行くわけ？
ミストレス　いや、あとでいきます。その後は、少年の方に話しをしに行きます。
ＧＭ　はい。じゃあ少年と貴婦人はふたりは、レヴィンのところへ行った。
アル　こんこん。
レヴィン　じゃあゆっくり食べながら。
ＧＭ　部屋の中には、ティファがベッドのかたわらに座っていて、粥かなにかを食っているレヴィンがいる。
アル　「レヴィンお兄ちゃん、大丈夫？」
レヴィン　「ああ、大丈夫さ。ちょっと血を吐いただけさ」
アル　「（笑）」
アル　「なにか、病気だったの」
レヴィン　「ああ、昔から身体が弱くてね」
アル　「ふーん」
ＧＭ　（ティファ）「そうなんだ。でも、もうすぐ、もうすぐだから、ね」という風に、彼女は、少年に向かって、いうわけだ。
アル　「もう治るの？」
ＧＭ　「ええ、もう治るのよ」という。
アル　「ほんとに？」
ＧＭ　（うなずく）
アル　「そっか。うん。良かった。いい、お医者さまでも見つかったん？」
レヴィン　「みたいだね」
ＧＭ　えー。**そう**いうんだね？
アル　「うん」
ＧＭ　（アルに）そう言うと、ティファは、今朝のことがあって、多少、気が弱っているんだろうか、あなたに抱きつく。で、こう呟く。「ごめんね、私のわがままのために。ごめんね」という。
アル　「ん、何で、そんな事いうの？」
レヴィン　「ティファ、一体どうかしたのか」。
ＧＭ　「ごめんなさい。少し、今朝のショックで、ちょっと気がたかぶってるみたい。顔を洗ってくるわ」と部屋をでるよ。
アル　「え？お願い、待って。ききたいことがあるの。あの小屋で何をしてるの？」

レヴィン　「小屋？」
ＧＭ　「…見たの？」
アル　（うっとつまる）。
アル　「見てない。でも、」
ＧＭ　「じゃあなぜそんなことを」
アル　「でも」じゃあ、その場から去りますね。ちょっと、涙をこぼしながら…。
では彼が、でていき際に、「アル。後でもう一回来てくれないかな？」
レヴィン　「うん？」
アル　「君と話がしたいんだ」
レヴィン　「うん」
アル　それを言い終わった後あたりで、入ります。
ミストレス　じゃあ、ふたり、いるよ。
ＧＭ　じゃあ、僕退場しますね。
アル　「あ、これは、ミストレス様」。
レヴィン　「具合が悪いそうだけど？」
ミストレス　「ええ。でも、まあなんとか」
レヴィン　「そう」…顔色は？
ＧＭ　悪い。
レヴィン　（笑）
ミストレス　えーと、ごく端的に言おう。まず、そもそも根本的な問題があって、病魔、というのは、原蛇に属する、魔物なんだね。でこの主人は、原蛇の魔道師なんだね。つまり、この館にいればいるほど、病気は一方的に悪くなってく一方なんだ（笑）。
レヴィン　なるほど。
ＧＭ　主人も気がついてないよね、多分。そんなことは。
レヴィン　「とりあえず、今日、ですよね」
ミストレス　ええ。
レヴィン　「すべてが終わったら、彼女を連れて帰りたいんすけど、よろしいっすかねえ」。
ミストレス　「すべてがおわったら？」
レヴィン　「え、いやすべて…。いや、何か、やるんでしょ？」
ミストレス　「ええ。もちろん、明日の、明日なればあなたは彼女と一緒に、故郷へと帰っています」
レヴィン　「ええ、…。そういう意味で言ったんすけど、何か、語弊、ありましたか？はは」
ミストレス　…間をおいて、「…あなたは、何の為に、ここまできたの？」
レヴィン　「そう、ですね…。彼女に会いたい一心で…答えに、なりませんか？」
ミストレス　「会いたい一心で？」
レヴィン　「はい」
ＧＭ　「しかし、あなたは、その、病の身体でここまで来た。そこまでする必要があったのですか、あなたには」
ミストレス　「逆に考えたら、…彼女を探すって事だけで、僕の寿命は延びたかもしれませんしね。この**想い**があるからこそ、僕は生きてこれたと、思いますよ」
レヴィン　なかなかいい事をいうな。ご褒美に、このカードをあげよう（赤札の守護者）。一枚捨てたまえ。
レヴィン　そうきましたか…じゃあこれで（と１枚捨てる）
ＧＭ　「確かに、僕は身体が弱いし、旅ができる身体じゃないかもしれません。でも、そんな僕でもここまでこれたんです。それは、彼女を思う一心だし、彼女に、死ぬ前に、死ぬ前でいいから、ひとめ会いたいと思った。この想いがあるからこそです。それだけですよ」
ミストレス　ほう。
ＧＭ　「（胸をおさえながら）その為には、病であっても、病をおしてでも、旅をしてきたと。

※34
胸を押さえるといった身振りを交えたロールプレイです。参考になります。

レヴィン　…そう言っているのですね」（※34）
「（明るい調子で）そうですね。そうとってもらっても、結構ですよ。多分、その通りです」
ミストレス　「しかしあなたはこのままだと、…死にますよ」
レヴィン　「そうかもしれませんね。実際問題の話、ここまで生きてこれたのも、奇跡かもしれませんから」
ミストレス　「しかしあなたが死ねば、ティファは悲しみますよ」
レヴィン　「かもしれません。でも、…そうですね。…そこまで考えてませんでした（笑）。実際問題の話、僕は、彼女の顔を一目でもみれれば、と思っただけですから」
ミストレス　「それではもうあなたは満足なのですね。…あなたは、会えたのですから」
レヴィン　「いや、でも彼女の顔みたら、今度は、彼女と、少ない命でも、命と時間でもいい、彼女と一緒に暮らしたいって思っちゃいましてね」
ミストレス　「…生きている限り？」
レヴィン　「…生きている限り」
ミストレス　「…あなたは、強いのですね」と呟いて、静かに立ち上がって、部屋を出ます。
GM　はい、わかりました。
。この後どうします？
アル　僕ですか？…、そのまま出て多分、庭園の方に出るんだろうな。で、ひとりで、ぼうっと空でもひとまず眺めてるんだろうな。
ミストレス　私は、とりあえず少年を捜して、館を。
GM　じゃあ、しばらく探すと、庭園に座っているのが見えるよ。
ミストレス　じゃ、静かに、庭園の方へと向かいます。少し笑みを浮かべ、「ひなたぼっこ？」といいながら近づきます。
アル　「うん。そっ。ひなたぼっこ。うん。気持ちいいね、この太陽を浴びてると」
ミストレス　「…でも、何か見ているみたいだったわ。何をみていたの？」
アル　「…。ん…。空を見てたの。」
ミストレス　「そう」。といって、空を同じように見上げます。まぶしそうに。（前は…夜しか出れなかった、そして今は陽の光を浴び、空を見てる）
アル　「セラン、どこにいるのだろうねえ」
ミストレス　…（感傷を振り払い、姿勢を正して）「あなたは、その少女を追い求めて、ここまできたのよね」
アル　「うん」
ミストレス　「そんなに大事？」
アル　「でも、会ってみないと、わからない」
GM　「ご主人様。もう小屋の奥の方で、儀式が終えたようにございます。ジュナンをお呼びしましょうか」、と、ティファがいう。
ミストレス　「そう。わかったわ。呼んできて。…それじゃあね」、と一言声をかけて、小屋の方へ向かいます。
GM　アルをどうする？
アルＰＬ　小屋の方に、行くんですよね。…。
GM　もう一度だけ、少年の方を振り返った後、小屋の方に入っていきます。
アル　僕も、小屋の方に向かいます。うしろからゆっくりと、こっそりと。
GM　反応で対抗ですか。
アルＰＬ　３の、８ですね。
GM　８ですか。

ミストレス　１２。
レヴィン　５以上っすね。
アル　じゃあこれで、１３。
ＧＭ　じゃあ気がつかれなかった。小屋の隅で、壁越しに耳を傾けた、…しかし困ったことがあるんだが（笑）。ティファがジュナンを連れて、また来るだろう。
ＧＭ　ジュナンの部屋がノックされて、「ご主人様がお呼びです」
ジュナン　「今度は何のようだ」、と言うけどな。
ＧＭ　「いい、知らせです」と言ってにっこり笑う。
ジュナン　「そうか」。じゃ、ちょっと早足で。
ＧＭ　しかし、彼女は君に靴をなめろ、と言った女だぞ。（笑）
ジュナン　え？
ＧＭ　彼女は君に昨日、靴をなめろ、這いずって靴をおなめ、と言った女なんだぞ。…まあ、いいや。君はにこにこしながら彼女の後をついていくんだね。
一同　…（爆笑）。
ジュナン　複雑やなあ。せっかくその、事を忘れようとしてたのに（笑）。…忘れさせたくないのか。
ＧＭ　ジュナンと二人がきたよ。
アル　…。あ。隠れられますかね？
ＧＭ　反応でどうぞ。反応で対抗ロール。
アル　えっと１３です。
ジュナン　１４。
ＧＭ　じゃあ気がつきました。隅の方に少年、アルが隠れている。
ジュナン　…。見つけてどうしよ？うーん。…。隠れてるアルを見つけたんだね？
ＧＭ　そうだね。盗み聞きしようとしてるんじゃないかぐらいはわかるよ。
ジュナン　気づかない振りをします。
ＧＭ　そうなんだ。じゃ、入った。…少しは反抗するんだね。（ティファ）「ジュナンをお連れしました」
ミストレス　「そう。こちらへ」と。
ジュナン　奥についていきます。
ミストレス　「ジュナン。よく来たわね。あなたが待ち望んでいたときがきたわよ」。
ジュナン　「…」。礼をいうべきか、どうなんだろうか…。
ミストレス　「さ、こちらへ来なさい」
ＧＭ　言われるままに行きます。
ミストレス　「よろしいですか、ご主人様？」と水槽の側にティファがかがみこんで、水槽を開けようとしますが。…「開けてよろしいですか？」
ＧＭ　じっとジュナンの方をみつめながら、「ええ」、といいましょう。
ミストレス　じゃあ、女物の小さな服と、ちょっと大きな服を用意したティファは、水槽を開ける。水が、床へと零れ落ち、そして、染みていく。
ジュナン　ふと、ふたりは、ん、といって目をつぶったあと、ゆっくりと、目を開け、あなたの方を見る。「ここは？私たちは、死んだはず…。あれ、あなた、何故ここに…？」と、妻がいう。ちなみに娘の方は、呆然としているようですが。ティファが「これを着なさい」と言って服を渡してくれる。
ＧＭ　その様子をじっとみつめる。
ミストレス　ふたりともがーと服を着るのをまって、１回ずつ抱きしめた後、「ありがとうございます」
ジュナン　ティファがくすくすと笑う。で、あなたの方を見る。
ＧＭ　私も笑みを浮かべてじっとジュナンさんを見つめよう。「あなたの望みはこれで、果た

ジュナン　されたのですよね」
ミストレス　はい。ありがとうございます。
ジュナン　「さあ、こちらへ来なさい」
ＧＭ　じゃあ二人をつれて３人で近寄ろう。
ミストレス　夢歩きさせますか。
ＧＭ　させましょう。
カードこっちで出してもいいよ。じゃあ２枚出すことにしよう。
『受け入れよ求めよ、汝はすでに私のもの』
えー。「よかったわね」、と彼女が言った。ゆっくりと目を閉じた。あなたの目に幻影がうかびあがる。「どうしたの、お父さん」、というなつかしい娘の声がする。『この場所こそ我が故郷。これだけは決して忘れない』故郷はもうないけれど、幸せに家族とともに、暮らす生活が、これからは待っているんだ、そう思うと、あなたの心は躍る。しかし、その夢を、別の夢がおおいつくす。死者を復活させる為に、必要だったものが、ある。石台の上に、あなたもよく見知った少年が横たわり、そして、ゆっくりと、ナイフがその胸に沈んでいくのを、あなたは、見る。「よかったわね、彼女らが復活して。あなたのその幸せは、生活は、彼の犠牲によって、成り立っているのよ。これは、これから本当に起きること。どうする？邪魔する？止める？止めたら、彼女らはもう２度と、あなたの手には戻らないのよ。さあ、卑怯者よ、故郷でゆっくりと安寧な暮らしをすごすがいい」と、夢の中で何かがいう。
『受け入れよ求めよ、汝はすでに私のもの』
夢の中で、何かが高笑いをあげる。
ＧＭ　で、はっと覚める。真相がわかったね、さあどうする？「お父さん、どうしたの？ここはどこなの、一緒に帰ろうよ」、と娘がいう。
ジュナン　は、は、は、はは、は…。まあしゃあない。
ＧＭ　「ごめんな」と呟く。
すまない！と言いながらあなたは家族の手をとり、小屋の外へ走っていくのか。…いいのか、それで？
ジュナン　はい。（※３５）
ミストレス　じゃあ、私は、ちょっともの悲しそうに、何故かため息をついて小屋を出ます。
ＧＭ　（ティファ）「…卑怯者には、ふさわしい末路ですわね」
ミストレス　「…ええ、そうね」、と沈んだ声でいいましょう。
ＧＭ　「浮かぬ顔をしておられますね、お父上の仇を討たれたというのに」
ミストレス　「…（棒読みで）いえ、せいせいしているわ、さあ館に戻りましょう」
ＧＭ　わかりました。
アル　二人の女性が、彼と一緒に、外に出て行くんですよね？
ＧＭ　うん。「おとうさん待って、早すぎる、そんなに走っちゃだめー」、とかいいながら走っていく。ミレーヌでもセランでもないよ。
アル　ですよね。
ＧＭ　あとをみないように、歩兵は走り去っていく。…。
ミストレス　「じゃあご主人様。私はもう館に戻って準備をすすめております。レヴィンの看病もありますので」
ＧＭ　「ええ」
「夕刻まで、時間をつぶしていてよろしいでしょうか」

※３５　こういう復讐の仕方もあるということです。
ここでアルに縁故がふってあればさらに過酷な選択になったでしょう。
なお、こういう場面で、逃げない、という道を選ぶ人もいます。それもまた美しい、といえるでしょう。

ミストレス「ええ。あなたは、レヴィンのそばについていてあげなさい。もうすぐあなたの望みはかなえられるのですから」あとは、きこえないくらいの声で、「そして私の望みも」と呟きましょう。

ＧＭ　はい。…じゃあ戻ってきました。じゃあ、アルくんはどうしましょう。

アル　屋敷の方に、戻ります。

ＧＭ　ちょっとまってください。影に隠れてたんやね。反応で１５以上だしてください。

アル　カードがあればなんとかなる、かなっと（ころころ）。１３の、…これで、１５以上です。

ＧＭ　はいわかりました。小屋の中が、見えるよ。閉まる前に。小屋の中には人っ子ひとりいなかったよ。

アル　何も存在しないん、ですか？

ＧＭ　じゃあ…、えっと。どうする？

アル　とりあえず、無人のその小屋の中にこっそりと、

ＧＭ　入りますか。床には白えんで、なにかチョークで、何か妙な図がかかれてあり、隅の方には、割れた水槽があって、人が住んでいる様子がまるでない。

アル　他に特に目立ったようなんありますか。

ＧＭ　じゃ、交易語で判定をしてください。

アル　１０ですから成功です。

ＧＭ　成功ですか？えー、すみの方に走り書きがある。そうだね、その、隅の方の紙切れを見るとそこには、そのマークがかいてあった（八弦琴の魔法陣）。たぶんこれも、この陣の一部なんだろうけど、この紙にはこう書いてある。『時と空間を支配する、物語を司る魔族（イェロマーグ』（※３６）

アル　イェロマーグ？知ってますか？

ＧＭ　知らないです。

アル　…。うーん。

ＧＭ　わからないよね。なんか、えー、足音がするよ。軽いから女性じゃないかな？

アル　後ろからですか？

ＧＭ　どんどん小屋に近づいてるよ。

アル　じゃあ、かくれます。

ＧＭ　「ああ、陣の乱れを直しておかなければ」、といってティファは入ってきて、水にぬれてちょっとにじんでしまった陣を書き直してから、去っていく。

アル　…屋敷の方に戻ります。

ＧＭ　何もせずに、戻りますか？

アル　じゃあそのイェルマーグっていう、メモがあったんですよね？それだけ、持っていきます。拾って、ポケットの中にくしゃくしゃっと。そうなんだ。まあいいです。わかりました。えっと今３時くらいです。どうしますか、これから。

ＧＭ　これから、…えーと、レヴィンさんに確か、会いに来て欲しいって呼ばれてたんで、レヴィンの所に、むかい、ます。

アル　とりあえず、とりあえずこっちは、大分体調が良くなって、きたんかな？

レヴィン　レヴィンさん。ドアがノックされる。アルが入ってきたよ。

アル　「あ、どうぞ」

レヴィン　「うん。レヴィンさん、どう？体調は」

アル　「あ、さっきよりましかな。ところで、そこの扉閉めて」

レヴィン　「うん」がちゃり。

アル　「さて、君にききたいことがあるんだ。君は一体、あの小屋で何か、あの小屋の事を何か

※３６
世界の書ｐ５４参照

アル　知っているのかい？」
レヴィン　「うん」
アル　「一体何を知ったんだい？何か僕らには言えないこと…だろうなあ」
レヴィン　「そこに、女の人がいたの」
アル　「女の人？」
レヴィン　「うん」
アル　「どんな？」
レヴィンＰＬ　「うーん。あと、それで、こういうメモを見つけたの」
ＧＭ　たぶん魔族の名前はこっちもわからんからどうしようもないなあ。といっても。魔族知識ってなかったっけ？…ないか伝書使は。
レヴィン　「なるほどねえ」
レヴィン　「いま、あの、ミストレスさんってどこにいるかわかる？」
アル　「その儀式がおわったあと、たぶん、屋敷の方に戻られたと思う」
レヴィン　「うわっちゃー。こりゃあれかな、書斎の方に、自分の部屋の方に戻られたかな。さすがにからだ動かなかったからなあ。今からじゃ行っても無駄だろうなあ」
アル　「ぼくは今から、ミストレスさんのとこ会いに行こうと思う」
レヴィン　「あ、そうかい」
アル　「うん。だからその前に、さっき言われてたことを思い出して来たんだよ」
レヴィン　「ああ、ありがと」
レヴィン　ま、かといって今うごけないしなあ。（ＧＭに）身体の方は動けます？
ＧＭ　激しい運動をするときは毎ターン判定して。
レヴィン　うっ。うーん。そうだなあ。こまったなあ。だいたい何をしようというのはなんとなくわかったけど。わかったけどぅ。うううぅ。
アル　「ねえアル。今から約束して欲しいことがあるんだけどいいかな？」
レヴィン　「うん？どうしたの、おにいちゃん」
アル　「もし君が、自分の身に危機を感じたときは、この屋敷を出た方がいい。この屋敷は脱出した方がいい」
レヴィン　「出るの？でも今日はもう約束の日だから」
アル　そうだなあ。そこなんだよなあ。うーん。じゃあ、「もしもだよ、約束の時間までに自分の身が起こったら、自分の身に何か起こるんだったら逃げた方がいいよ」
レヴィン　「ありがと、ぼくのこと心配してくれて。でも、ぼくは、大丈夫だよ」
アル　「でも、もしほんとにやばくなったと思ったら、私の馬がある。馬小屋につながってるアルビオンっていうんだけどね、その馬に乗って逃げた方がいい。君、馬、のれるだろ？」
レヴィン　「うん。うまいよ。実は」
アル　「はは。よし、なら僕の馬があるからそれ乗っていってくれたらいい。いいね？」
レヴィン　「うん。わかった」
アル　「ああ」

ＧＭ　さて、どこに行くんだい？
アル　ミストレスさんの部屋に。
ＧＭ　はいはい。来ました。いまティファと二人で、今晩の打ち合わせをしていますが。ドアがこんこんとノックされて、「どうぞ」とティファさんが言い、君がはいってきた。
アル　じゃあ、かちゃっとあけて、「今日、あえるんですよね？」
ミストレス　「どうしたの、急に？そんなことを」
アル　「んん」

ミストレス　「心配しなくても、今晩、全てが、満たされるわ」、といっておきましょう。
ＧＭ　今４時ぐらい。これだけ話すと。４時ぐらいだね。
アル　…。「そうだよね」
ＧＭ　君がそう呟くと、ティファの方の目に涙が、ひかる。で、もう一度また、あなたを抱きしめようとする。「ごめんなさいね」、と言いながら。どうする？抱きしめられとく？
アル　ええ。
ＧＭ　ああそうなんだ。ごめんなさいね、と言いながら、**今度は**、あなたの首に針を突き刺そうとするのですが、よろしいでしょうか？
ミストレスＰＬ　…よろしいもなにもない（笑）。
ＧＭ　抵抗、２５、ぐらい。
ミストレスＰＬ　え？何の抵抗ですか？
ＧＭ　体格で抵抗。
アル　失敗です。
ＧＭ　失敗ですか。
ＧＭ　意識はあるが体は動かない。動けなくなる。口も、しゃべれないんですよね。
アル　しゃべりたかったら、しゃべりたい時に、夢歩きをだしてください。意志判定で１５以上でもＯＫ。
ＧＭ　じゃあ、くずおれた少年のところまで歩いていって、見下ろしましょう。
ミストレス　「祭壇に連れてきますか？」
ＧＭ　「ええ」
ミストレス　「ご主人様、この者の望みを必ずや、かなえてみせましょう。この儀式がおわったあとに」
ＧＭ　じゃ、少年の額にくちづけして、「ゆるしてちょうだいね。セランちゃんは、私が必ず助けてあげるから」と一言呟きましょう。
ミストレス　で、小屋に連れてくんだよね？
ＧＭ　つれてきます。
ミストレス　はい。では、レヴィンさん。あなたの愛しき人は、アルをかかえて、ぴくりとも動けない状態のアルをかかえて、小屋へと入っていくのが、窓から見えるよ。
ＧＭ
レヴィン　それは…体をおして、行きますよ。「アル。だから気をつけろっていったのに」
ＧＭ　さて。、歩こうとするんだったら、判定してね。
レヴィン　１５。
ＧＭ　それは出さんと、彼がかわいそうなので、出す。１５。
ミストレス　歩きます？必死であなたは、ゆっくりとゆっくりと館を歩いている。
ＧＭ　その頃一方小屋では、「準備が整いました。ミストレス様」。祭壇の上には、黒い闇が、存在している。あなたは、深い恐怖をおぼえる。闇の中、赤い瞳がきらめき、そして、あなたにはこういう。「さあ、汝の望みをいいながら、我に贄を捧げるがいい。その時、汝が望みがかなえられるであろう」
ミストレス　じゃあ再び少年の方を、少年の方に目をむけて、じっとみつめたあと、
ＧＭ　はい。
ミストレス　おもむろに、短剣を、ふりあげます。
ＧＭ　（レヴィンに）脇で、ティファが見てるんだが、ここから先、いつでも飛び込んできてＯＫです。
レヴィン　はあ。…つきたてようとしてるんですよね？それはもうとめるしかないよね。
ＧＭ　で、ティファがゆっくりと呪文を唱えると、あなたの上の、祭壇の黒い闇が、少しずつ少

ミストレス　しづつ濃くなっていく。「望みは？」
「私は、…あの思い出の、少年にもう一度、会いたい」〔※３８〕
ＧＭ　いつでも飛び込んできてね。
レヴィンＰＬ　はぁ。
ＧＭ　そういって…、ナイフを…、振り下ろそうと…、し…
レヴィン　「やめろ！」
ＧＭ　を、やるために意志判定をして１５。
レヴィン　７の、９の、…６で１５（ぜいぜい）。
ＧＭ　（たんたんと）…大変だね。
レヴィンＰＬ　やめろっ、と言って、ええと。あなたは、ナイフをはしっと、止める。その瞬間に、全員の脳裏にすべての真相がわかる。そして真相がわかると同時に、黒い闇が、「ばかな、儀式を途中でやめるとは」と言いながら、何やら不穏な音が響く。ティファが呆然と呟く
ＧＭ　「まずい、暴走してしまった」。さて真相なんですが、夢歩きをしてください。
レヴィン　は。いや、全員？
ＧＭ　ちょっと待って、全員６枚までカード補充しましょう。
レヴィン　じゃあこれで、真相を知るためにはこれが一番でしょう。
ＧＭ　『我は鏡。汝の過去を愛してあげよう』
全員の脳裏に一瞬で、真相が明らかになる。
今、彼女が呼び出そうとした魔族は、魔物というのは全ての時と空間を支配する魔族、物語の魔族イェロマーグ、と呼ばれています。
ちなみにこの魔族がどういう魔族かというと、人々が悲劇の中で、苦しみもがくのを嘲り笑いながら物語りを収集するとても質の悪い魔族です。

※３８
後で尋ねたところ、アルのプレイヤーに真相がわかったのはこの時点らしいです。ミレーヌ＝ミストレスだったわけですね。

（ミストレスを指して）彼女は、ずっと不幸な人生を送ってきたのです。幼少期の一時期を除いてね。幼少期の頃、体を壊して友達と遊べなくなり、その後町へ引っ越した後は、戦乱に巻き込まれて、戦災孤児としてずうっと日々を過ごしてきて、魔道師に拾われて、旅の魔道師に拾われて魔道師になったのはいいだけども、その魔道師がロリコン野郎のとんでもない奴で、というすごい悲惨な人生を送ってきたわけだ。そんな彼女がひとめ、ひとめだけでも幼少期の頃のあの、なつかしい少年と、思い出のあの少年と、再会したい、とそれが彼女の望みだったわけだ。…ひとつだけ問題がありまして。イェロマーグという奴は、時間と空間をねじ曲げることができるんですね。…彼女が昔、会っていた、少年というのは、誰かな？
（アルを指す）
そう、すべてがわかったね。
レヴィン
ＧＭ　（ここで、出てこようとする魔族との戦闘シーンが挿入される）
ＧＭ　では、その影は解けるように消えて行った。。
さて、この後どうするか含めて、エンディングの夢歩きに行きましょう。自分がこの後、どういう風にしたいかを、言ってください。
カードは６枚まで補充…しましたね。
ＧＭ　で、この後、どうします？
レヴィン　とりあえず、ティファを連れて、行きますかね。

ＧＭ　「ごめんなさい。私のこんな、こんな非道な姿、見て欲しくなかったのに」といいます、彼女は。

レヴィン　「君が僕を助けてくれようとした気持ちはわかるんだ。ただ、その道が間違ってただけだ、たぶん。僕と一緒にここから出て、一緒に昔の町で暮らそう」

ＧＭ　わかった。山札をめくって。カラーナンバーは？

レヴィン　カラーナンバーは、３です。

ＧＭ　あなたは３年後に肺病で没したが、その３年間は、幸せに彼女と暮らすことができました。

『未来を見よ。我はここに世界を編む』

ＧＭ　さて、ジュナン。

『嵐に荒れた海も、時が過ぎればすべてを飲み込み、静かとなる』

「おとうさーん」といいながら、今日も遊びから帰ってきた娘が、帰ってくるわけだ。平和な日々でいいね。

ジュナン　そうだね。故郷となった国は滅びたから、どっかに志願してるか、狩人かなんかになって生きてるかな。

ＧＭ　時々、夢を見ます。この卑怯者、とあざけり笑う、彼女の夢を。

アルＰＬ　（笑）

ＧＭ　ミストレス、あなたはどうします？

ミストレス　私は、よろよろと、祭壇の上に横たわる少年に、抱きしめます。…涙を流しながら。「やっと、やっと会えたのね」

アル　「ミレーヌ、だったんだね」

ＧＭ　『答えを求めるのは愚かさのしるし。ぬくもりはすでに我が胸のうちにあり』

アル　えーと、（アルに）あなたの耳に、旅の最初に出会った女の人の、声が聞こえてきます。

ＧＭ　「強くなれた？人の心の闇をのぞき見て、それでもなお彼女のために戦えるだけの強さを、君は得られた？」ときいてくる。

アル　「う、…。」

ミストレス　「君が、セランの為に立ち向かわねばならないものは、これよりもさらに深い闇。これよりもさらに黒い深淵。そのために強くなれたかね」ときいてくる。彼女が、闇にとらわれようとしているイメージが脳裏に浮かぶけどね。どうする？

アル　うん。もう大丈夫。かな？…うーん。

ミストレス　「大丈夫。あなたには力がある。あなたのおかげで、私は、あの、楽しいひとときを過ごすことができた。私はあの想い出をずっと胸に秘めていままで生きてこれたの。あなたには、それだけの力があるわ」

ミストレス　「でも、あの時、わかれるときに結局、いえなかったことが、あったんだ」

ＧＭ　「なに？」

アル　「まだ僕には力がないかもしれないけど、君のことずっと守っていきたいな、って」

ミストレス　…じゃ、淡く微笑んで、「その想いがあれば、きっとあなたは自分の大切な人をまもることができるわ」と呟きます。

ＧＭ　「さあ、どうするのかね？もう、故郷に、帰り、平穏な日々を過ごすのかね。それもまた良かろう。闇と戦えるだけの強さは得られたのかね」（※４０）

アル　私は、静かに立ち去ります。

ミストレス　で、ひとり残される。さあどうする？

ＧＭ　その質問が自分の頭ん中で、まわってる感じなんですよね。

アル　そうだよ。

ＧＭ　「…うん。強くなれたよ」

※４０
ちなみに、この声の主もイェロマーグです。

GM　「わかった。じゃあ、いまから向かうがいい。彼女はおまえの助けをまっている」

アル　「うん。行くよ」

GM　というところでこの話は終わりです。ありがとうございます。

PL　ありがとうございました。

――――――――――――END――――――――――――